根底と歸趣

セルリンク曰く、自然は未だ發展せざる狀態にある所の無意識的精神なりと。

世界は相待的に對立すると同時に絕對の存在することは已に理論のゆるす所ならん此世界の相待因果生滅は自己を所依とするにあらずして其超然たる高等なる理性の根底を所依と爲すべし。而して根底なる實體は絕對ならざる可からず。此世界及び衆生等は依佗起性即ち衆緣の相關に規定せられて自己實體にあらず。此因緣の相關の依佗規定なるものは其規定の極には無規定に到らざるを得ず。此無規定の極に到らば即ち絕對なり。此相待規定を盡して後無規定絕對の實體が始めて顯はるゝに非ず。此相待規定を總合し統一する處の理性が卽絕對なり。法界觀門と及び註に現象世界と實體との區別を明すに三義あり（意を取るのみにして本文に非ず）（分量と象相と性質との區別に三義あり。）

一、無限の義。謂く實體は無限なり。實體若し有限ならば現象界は實體の外にあらん。喩へば空無限なり、空を離れて何の處にか色法あらん。現象世界は相互に分限して無限に非ず。分限の世界萬物は無限の實體と區別せざるべからず。

二、無壞の義。世界因果規定の萬物は成壞生滅ならざるなし。實體には生滅成壞なし。生滅の世界萬物は無成壞の實體と別たざるべからず。

三、無雜の義。世界相待規定の萬類は物心等は衆質雜混す、實體は至純至粹の性質なり、故に世界と實體との二質は別たざるべからず。

是の如く相待世界因果規定と實體の絶對とは區別す。世界衆生は有限に生滅し衆質混雜し實體は絶對無限の本質にして、永恒自存して滅壞なく純粹の本質のみ。斯く世界と實體を別ちて而して後實體は根底と統攝と歸趣の理性なるやを論究せんとす。

實體は世界的の本體にして世界の根底にしてまた一切の世界萬物を統一擔保し而してまた一切勢力の最終の歸趣たり。

根　底（客體）

今日の一元論は萬物皆活けるを認む。生物學心理學も同じく皆物質の皆活けるを認む動物植物其根本無差別なり。

宇宙（世界及び衆生）は相待因果に規定せらる。所謂る因緣所成法にして衆質相係より成立する者なり。

中論に因緣所成の法は卽ち假なりと。種々の衆質互に素因となりまた助成規定となりて成立す。世界の十界、三千の性相、七大物心の二質と成る。

此相待規定なるものは偶然に相寄て成立せるものに非ずして若は依報正報若は色心一切の身心土の規定は偶然に非ず。規持の統一秩序を有せるなり。個々は各自己より生れたるに非ずして高等なる理性の根底によりて成立するものとす。密師の原人論に萬靈蠢々皆其本あり、萬物芸々たる各其根に歸す。況んや三才の中の靈たる本源なか

らんや、自ら自己の從來せる所歸趣する處を知らざるべからずと、

古來世界及び衆生の本源を研究するに、之を究むるの意識の深淺に從て根底を見ることまた深淺あり階級あり。今萬物の根底を研むるに淺劣なる天然教より高等に發達したる圓具教の究むる所に至るまでを三つに分ちて説明せん。

一、天然教　二、超然教　三、圓具教。

初、天然教とは幼稚なる宗教意識、即ち原始的宗教なり。純朴なる天然の人には其大本なる神の觀念は天然現象の中にありと認む、亦天然の物素と一なりとし深奥の理を省慮せず、故に彼等は世界觀に於ても天然現象を超ることなく人生觀も又同じく天然的なり。原人論に、所謂儒教を習ふ者は人の本源を説くに、「祇知る近は則ち乃祖乃父が體を傳て相續して此身を受得たりと。遠くは即ち混沌の一氣剖れて陰陽の二と爲る。二、天地人の三を生ず。三、萬物を生ず。萬物と人と共に皆氣を本とす。虛無大道が一切を生成養育すと。謂く道法自然が元氣を生じ、元氣天地を生じ、天地萬物を

生す。故に智愚貴賤貧富苦樂皆天に稟け時命に由ると。」密師曰く彼等身の元由を究めず、所說萬物象外を論せず大道を本と爲と雖も順逆起滅染淨の因緣を明さず、

我國の神道の造化の三神の說の如きは天然教たることは論を俟たず。天然多神教も埃及天然一體教に於ても皆天然的に本に立て、萬物の發生を認む。スピノーザの汎神論も及び今日の自然科學の唯物論者の如く、盲目的機械的世界觀は自然現象に根底としまた實體とす、未だ超自然の精神態實體を認むる能はざるは、悉く是等を自然教とす。

古代の宗教的意識の幼稚なる時代には客觀の觀念、天然的を超越する能はざるは止むを得ず。文化發達したる時代と雖も人の意識は種々階級ありて、唯機械的物質的に發達したるも精神に於て超自然の觀念內容にして進化發達せざるものは機械的世界觀に墮せざることを免れず。經に心生ずる時は種々の法生ずと。心に依て世界觀を異にす。青眼鏡をもて萬物を青色に見る如く、世界觀は各自の意識によりて種々の異樣に

見るなり。

超然教根底

超然教は天然物素を超越して精神的に根本及び動力を認むるが故に超然主義とす、人天と小乘は本質を認めずして業即ち動力のみを根本とす。法相は唯識にして精神態なり。

原人論に華嚴經によりて五教に分ち、

初に人天教は、三世業報善惡因果三善三惡苦樂の報命を感ずるは各其本源は業即ち羯磨に因る。然るに業に三種あり、善と惡と不動との業作が三界苦樂の報を受る元因たり。若し業なき時は報の感ずべきなし、故に人の根本は業動力とす。個人業動力とす。個人業力を根本とす。

小乘教には、人は身心共に無始劫より已來、因緣力の故に生滅し相續窮りなし。身體と精神とは假に合して一に似たり、常に似だり、凡愚は覺せず、執して我と爲す、

我によつて貪瞋痴の三毒を起し、身口に行動して一切の業を造る。業遁れ難し、故に五道苦樂の身と及び三界勝劣等の處所受の身を執して我と爲し、還た業を起し報を受け、身は則ち生老病死、死して亦生す、界には則ち成住壞空、空にして還た成す。小乘また惑業をもて生死及び世界の根本とす、個人及び共同の業力を以て世界を感ず心の力用を本として未だ心相を立てず。

法相は、唯心論、迷悟心體を異にす、藏識は自然界の根底、一轉して三身四智と成る。

大乘法相家は說く、一切衆生無始より已來、法爾として八識あり。第八賴耶識是其根元。頓に根身器界種子を變じて轉じて七識を生ず。皆自分の所緣を變現して都て實法なし。如何變ずるや。我法分別薰習力の故に諸識生ずる時變じて我法に似たり。第六七識無明覆ふが故に此を緣して實法を執す。喩へば重病を患て異色なる人物を見るが如し。患力の故に實に人ありと謂ふが如く、我身も唯識所變なり、賴耶識を以て身

の本と爲す。

破相敎は說く、一切因緣より生せざる者なく、是故に一切の法は空ならざるなし、因緣所生の法は我說く即是れ空と。信論に一切諸法唯妄念によつて而も差別あり。若し心念を離れば即ち一切境界の相なし。是敎には空をもて身の本と爲す。此等を超然敎と名づく。

一乘顯性敎。一切有情皆本覺眞心ありて無始より已來常住淸淨にして昭々として昧まず、了々として常に知る、亦佛性と名づく、亦如來藏と名く、無始より妄想之に翳して本質を自から覺知せず、但凡質の方面のみを認むるが故に耽着して業を結び生死の苦を受く。又靈覺眞心淸淨にして全く諸佛と同じきを開覺す。華嚴經に曰く、佛子一衆生として具に如來智慧有らざるなし。但妄想執着をもて自ら證得せず。若し妄想を離れては一切自然智無礙智即ち現前するを得と。

（精神敎の一體兩方面迷悟差別あり、體一なり。衆生誤て迷方面を見る、本覺眞心を

根底と爲す）

圓具教

相待的規定なる世界及び衆生は自己より出るものに非すして必す高等なる根底なる絶對にして無規定の理性によつて成立するものとす。

絶對にして無規定なる實體、即ち世界及び衆生の根底をあみの法身如來藏性と名づく一切世界と衆生とは此法身理性の規律の統一的秩序より出でたる世界及び衆生なりとす、故に楞伽に十方國土及び衆生等はあみた國より出づとは是なり。此教の一切最終の根底は即ち阿彌の法身とす。即ち永恒自存精神態なりと爲、華嚴の本覺眞心とは同體異名なり。絶對精神態の體質は後に論せん。

宗教意識の原始なる天然教より最圓滿に進化したる圓具教に至るまで漸次に發達せしなり。原始の意識には世界其ものに實體根底を發見すること能はす。次に進で超然教には實體と世界とは其性質隔別にして世界の本質を斷盡絶滅するに非ざれば實體顯

示することなしとす。

次に圓具教には、世界には別に本質あるに非ず、世界の實體即ち本覺眞心態即ち世界の實體なり。世界を絶滅して後に實體顯るゝに非ず、現象と實體とは一體の兩方面のみと、故に世界の根底は則あみの法身なり。

圓教の根底は本覺眞心即ち阿彌法身なり。

世界直ちに絶對の本質と云ふべからず、先に示せり。

統一擔保の主體

世界の根底を宗教意識の三級によつて三等に分ちたると同じく、世界及び衆生即ち宗教主體の一切の個々を統一し、擔保するところの絶對主體を究めんとするに。根底と同じく初め

天然教には世界物素天然的己上には之を統一し擔保する主體あることを認むるなし

此世界衆生を統攝し保存する勢能は天然物素にある勢力にして天然物的己上のいかなる本質理性あるべきを意識せず。

絕對と世界とを對峙する觀念には、絕對理性と世界及び衆生、相待的の規定は是自然にして然るに非ず、法身の規持する統一秩序を有し高等なる實體によつて統一し擔保せらるゝものにして、相待規定なるものは、依佗起性の因緣のみにして規持すべきものに非ず。

精神的宗教には天然的の依佗規定の生滅現象の己上に之を統一せる絕對の本質を求め、之によりて相待規定の生滅因果の世界より解脫すべき理性なりとす。之を統一し擔保するの本體にして世界と同等の性質ならんには之と併立し之が爲に諍爭し之に局限せらるゝが故に絕對と云べからず。また絕對とは一切を綜合せる天然界なりとせば儒教にて大極乾坤陰陽の元氣がとほく世界を統一し擔保するは天地自然の力によるものとする如き自然教に墮す。又道法自然に保存せらるゝと云ひまた天然一體教及び自

然科學にても太陽のエネルギーによつて保在し活動すとの觀念は天然的幼稚なる意識にして即ち天然機械的盲目的規律によつて保存せられまた統一せらるゝものとし、彼等は天然界は超自然の高等なる實體の爲に統一し擔保せらるゝことを意識せず。故に天然教と名づく。

佛教の人天教には一切衆生は悉く各自の業力によつて保存せらるゝものとし、各個人の統一秩序の本あるを明さず。小乘教は個人の惑業力によつて各個人は自己の業力に保存せらる、世界一切の衆生の共同業力によつて世界を保存すと。故に衆生の惑業が盡る時は世界も保存すべきに非ず、此教は業力を說て未だ本體を明さず、是方便のみ。大乘法相教には世界及衆生は悉く阿賴耶識によつて統一し保存せらる。唯識所變の世界なれば、識の轉依せざるよりは世界及び衆生は保存せらるゝものとす。破相教には世界所成の法の存するは因緣によつて成する所、唯妄念によつて差別の世界は保存す。若し念を離れては世界及び衆生あることなしと。華嚴經には唯一眞性不生不滅

變易なし、眞性には無限と無壞と無雜との三義あり。華嚴は超然に非ず。圓具に屬す

絕對無限の眞性と現象世界とは圓融無碍にして本質と現象とは離れたるものに非ず世界及び衆生を統一し擔保する本體は即ち絕對眞心なり。此眞性の妙用によつて保存せらるゝ故に世界斷盡して後に本體顯現するに非ず。若し斯の如きの見解は天然教に墮すればなり。

圓具教には華嚴と同じく世界衆生は相待因果を超たる高等の絕對眞神態に無規定の實體ありて之を統一し擔保す。本質と現象とは圓融無碍にして本體は世界一切を統一し擔保するのみに非ず、本質内容は豐饒にして無邊の聖德を具存し、世界萬類はこの本體の勢力に發展せられて發生すると共に之に統攝せられ、内容は豐饒なれば種々の方面に發展し之に勢力を與へて活動せしめ、又無邊の性德具存して種々の方面に發現し活動するのみに非ず。内面に常寂光土また蓮華藏世界ありて清淨法身及び塵沙の相好妙色身を示現す、而して又衆生を自己の内容に歸趣せしむるあり、是を終局目的の

理性とす。

（絶對同本質に、精神に隨て種々の異相を感見す、是本質別なるに非ず、精神の性質によるものとす。一水四見の喩。）

歸趣

世界一切の實體根底として一切を發生し之を統一保存する理性としては天則規律の秩序の理性としてまた一切の宗教主體を總括する根底の絶對主體たりとす。また一切個々の主體即ち衆生心には之を高等に開展して終局目的に眞理に歸趣せしむべき理性あり。衆生には歸趣の理性あるも之を開展し解脫せしむべき勢力を與ふるに非ざれば自ら開展し歸趣すべきこと能はず。之の歸趣の理性を明さんには先づ世界過程の中には唯物的規定の流行のみに非ずして動力的理想的の存在することは多くの理想家の認むる處ならん。天則の秩序の理性と歸趣の理性とは本質同きも衆生に對する功能は同

じからず。天則秩序には統一的理性、衆生佛性の一大本體としては終局には佛性を開展する理性として即一切態なり。

一切の理想的勢力は不識意識に拘はらず理想的歸趣の理性あるあつて自然に活動す人生を疑て歸趣も目的も認めざる懐疑論者は但哲學として成立せざるのみならず歸趣のなき空言に過ぎず。無情なる草木さへ日光を尋ねて其方面に蔓延するに非ずや。人の理想あるもの、盲目的生活に自ら安ずること能はずして歸趣の目的の光明を求むるは是れ全く歸趣の理性ある所以に非ずや。

天然の人は個人目的の外に絶對の歸趣の理性なく、終局目的あるを識らず、不識の中に自己の目的を立て盲目的個人的目的を第一義とするものは實に哀むべきものとす人は自己本來絶對の個人なるを開覺して其絶對の目的に協力するに至て始めて眞理に契ふものとす。已に歸趣の理性を發見したる後はこの協力的に力行せざる可らず。絶對終局目的の光としては一切態にて衆生精神開展してこの眞理の目的に歸趣せしむる

理性にして、之れ絶對より個人に光を與ふる智慧態たり、之を報身と名づく。報身といふも時間的因果的にあらず。目的論的に絶對目的が個人に對して攝取の光を與ふ。空間的に個人の信仰に對する報なり。信仰なければ報ひず。衆生は其客體に歸入して自己を亡じたる時客體の報身と致一す。

天然教歸趣

天然教、解脫とは經驗世界の惡毒を脫し客體に對する願望は有形感覺的を超えず。神も有形界に求め解脫と云ふも有形の苦を脫せんとの觀念に過ぎず。有形的利己主義幸福主義なり。故に其法規も德教も他律的たり。又歸趣の目的としても天然を出でず儒道二教共に天然教にして歸趣する處淺薄なり。孔子曰く死生有命富貴在天と。原人に儒宗萬物既に天地の元氣を稟て生す、草木の根に依て榮茂を得死する時は其本始に復る草木凋落して精脈其根に還るが如く、其稟る處の性命に復る、天地より生じて天

地に復る。郁子曰く、上天我を生じ上天我を死せしむ。儒宗執らく、氣聚るを生と爲す、氣散ずるを死と爲す。道家虛無自然を歸趣とし、印度の冥諦外道無因緣論等も天然を歸趣とす。天然多神敎及一體敎も亦歸趣する處天然的にして幸福主義なり。たとへ靈魂轉じて天國に生ずと云も其天國なるもの天然的幸福主義にして方處を換て快樂を願望する如きは其歸趣する處幼稚にして天然敎の範圍たり。唯物者自然科學の歸趣する處自然界を出ざるは論を俟たず。

其他東西を問はず天然敎に屬するものは悉く之に攝することを得べし。

超然敎の歸趣

波羅門敎は宇宙現象界は幻夢の如く眞實に非ず。客體の波羅門天は眞實清淨にして無限なり、此に歸趣する時は解脫を得と。佛敎小乘敎は五陰主我及び煩惱を斷し無我の觀智を以て貪瞋を斷し諸の業を止息し我空眞如を證得し乃至羅漢果を得て灰身滅智

方に諸苦を斷ず、之を終局とす。法相家は衆生法爾として五種格別の種性あり、有情無性は永く成佛せず、聲聞定性は眞空涅槃を歸趣とす、緣覺も亦同じ。菩薩種性は漸次に眞如を分證し終局賴耶を轉依して四智三身圓に證するを歸趣とす。

是等を超然敎と名づく所以は梵天敎には現世界を幻夢とし此を超越して彼岸の天國は絕對無限、此世界の有限と彼の無限とは其性質を異にすと。亦猶太敎及耶蘇敎には神は能造主、世界は被造物、能所質性を殊別にす、被造物は超然たる彼岸の天國に入らざれは神と合する能はず、神は絕對に非ずして高遠なる最高等の靈界に嚴臨す、法律と信仰とによつて救靈せらる、彼天國に生ずるを歸趣とす。また佛敎の中にも理論的形而上論を意識せざる淨土敎の宗敎意識も是等と同じく客體は高遠なる彼岸に在りて彼に至るに非ざれば知見しまた客體と合一すること能はずと謂へり。斯の如きの意識は宗敎々理の然るにあらずして象相の上に立ちて本體を明さざるが故に是淨敎形而上論を識らざる故なり。淨敎本圓滿なる大乘佛敎なり、焉ぞ圓具の理なからん。

梵天と耶蘇教と本體を明さざる淨土教との宗教的意識は終局目的と主體との分別を空間的卽方處に立て此處より彼に轉じて始めて眞實に客體と致一すと謂へり。佛教の小乘及び大乘法相及び空宗等は終局目的を時間的に或は百劫に滿位を得、或は三祇の劫を經て歸趣を得と。甲は空間的に超然の理を執し乙は時間的に超然の義を計す。小乘權大乘及び三論等は空間的客體によらず、自己の修行より因果律的に果分の佛果を顯示す。

圓具教の歸趣

華嚴經に佛子一衆生として具さに如來智慧具せざるなし、但妄想執着をもて自ら證得せず、若し妄想を離れば一切智無碍智卽ち現前すと。又初發心時便成正覺、所有諸身不由佗覺、淸淨妙法身湛然として一切に應ずと。又云ふ、如來涅槃界其量等虛空、一切衆生入而實無所入。

此乃ち一切衆生本來如來境界の中に在らざるなし、更に所入なきなり。人の迷ふが故に東を西と謂へり。悟る時は西のみ、衆生迷ふが故に妄を捨て眞に入るべきを悟る即ち一切眞なれば別に眞の入べきなし。

華嚴の圓具は主體と客體とが時間的に因果的に因より果に歸入す。

淨土教は空間に自己を捨て絕對なる客體に歸入す。絕對の彌陀より出たる主體は絕對の客體に歸入す。歸趣の本體も根底の絕對も同一なれども衆生よりの概念同じからず、また性能も一ならず、根底としては天則、發生。歸趣として佛性開展して自己に歸入せしむ。

衆生本來眞心了々不昧之を如來藏と名く。無明翳が故に自ら證得せずして生死に沈む。衆生具に如來智慧を具し之を開覺すれば本來是佛。故に須らく行は佛行、心は佛心に契ふべし。本に返り源に還り凡習を斷除して之を損して無爲に至り、自然に應用無窮なるを佛と名つく。

（已上華嚴、原人論の意を執る）

禪家曰く、一切法若は有若しは空、皆唯眞性。眞性無相無爲體一切に非ず謂く凡に非ず聖に非ず善に非ず惡に非ず、然も體の用としては能く種々を造るが故に凡と聖とを現す、心性を指すに二類、

一に曰く一切言語動作も慈悲貪瞋苦毒も快樂も汝が佛性是即體なり之を除きて別に佛なし、此天眞自然の故に心を絕し道を修すべからず、道是心、無斷無修に任運自在を解脫と名づく。本性本より不增不減、何ぞ添補を假らん。但時に隨て妄業を息め神を養ひ聖胎增長して自然に神妙を顯發す。此則ち眞修眞證なりと。二に言く諸法は總て夢妄なり。本寂にして塵境本より有ならず、空寂の心靈知不昧、是汝が眞性迷に任せ悟に任せ心本自知る。知の一字衆妙の門、萬行唯無念を宗と爲す。無念なれば愛惡淡泊にして悲智自然に增長す、自然に作佛す。

圓具敎の歸趣の義は古來あらゆる宗敎の最高等に進化したる宗敎的意識に適したる

觀念にして彌陀は卽絕對無限の本質にして其性能よりは一切を開展する理性又能として無盡の身心土を發現し、歸趣の理性としては一々の刹土に法報應及び變化身を示現して衆生を攝取同化の妙用を施す。本質の內容には無盡の性德ありて本質の眞神態を動さずして夫に發展せられたる世界的方面には地獄餓鬼畜生修羅人天の六凡の衆生界を顯す。此の六凡の根底は實體なり。絕對眞神態の外に別に實體あるに非ざるも、衆生は無明垢質の爲に自ら迷惑して六凡の垢質を實法と謂ふ、是迷なり。此衆生世界の方面より終局目的に眞理の方面に歸趣すべき理性あり。あみは一切智慧と能力とを以て一切を開展して無限の光壽の內面に歸趣せしむ。淨敎に時間なきに非ざるも目的は時間に關せず、たとへ三祇の時間を期するも目的に歸趣せざれば何の要ぞ。須く、唯目的を得るにあり、相待自己を絕對あみに歸趣するが目的なり。目的論は目的に向ふ時に之に對する空間的報身現はる。報身現する時自己を亡す。

主體客體を立つる絕對目的卽ち攝取の理性あり。客體を立る宗敎にして時間的報身

にあらざれば報身に非ずと執するは理にくらきの甚しからずや、何の爲にか報應の客體に歸入する。何ぞ因果時間教の客體の報佛を立てざるをせめざるや深く思ふべし。

宗教は直顯心性の心宗と直顯心性教と同じく禪には心性を自性天眞佛を客體とし性教には一眞法界を客體とし圓具にはあみを客體とす。宗教としては最圓滿完全なりとす。

十方三世法報應及び變化身も亦無盡の衆生界身心土も悉く阿彌を體とし阿彌隨緣の衆生は阿彌の中に在て自ら迷沒し、阿彌は十方法界の身心土の實體として常然無碍、不可思議の圓融無碍の體内に在て重々無盡具德の故に十方衆生は各異方面を見る。隨緣の地獄阿鼻焦熱と現するも本體は不變にして本自清淨なり。隨染には六凡の迷相を現し淨緣には四聖の悟相を呈し、六凡四聖は同の異方面に外ならず。阿彌無碍の中に諸佛賢聖は無盡の清淨國を現して安住しまた一切衆生を度す。迷的衆生となりては常に諸佛の爲に心性を開示せられ悟的諸佛となりては教へてあみの内容に悟入せしむ。

阿彌に歸趣の兩方面

阿彌の本質に歸趣する時は形式に常寂光土(即ち理性の智慧態を土と名く)と又塵沙の相好妙色身を示現し、七寶莊嚴の依果は則ち本質形式中の感覺的現象なり、已に歸入する時は眞我の中の自己にして絕對眞我の外に我あるなし。此常寂光即ち理智冥合絕對理性と智慧との致一態は必至滅度に入る性能なり。又常に神的活動としては普賢行願の德用なりとす。一たび阿彌に歸入する時は內面常然阿彌と致一にして表面には個體を現して阿彌の聖意實現的に神的活動す。

世界的衆生は表面は個々各別の如くなるも最深の內面に不可割的に統一せらるゝ理性あり。夫と同じく終局に歸趣すべきの理性あり。よりて開展して本元理性と致一す理性と一體たればなり。個人にも此性能本より具備す。然れども未だ意識せざるが故に主我を執して迷沒す。本眞に歸趣することを得す。人佛知見啓示によりて絕對眞心

を知り、心情に歸命融合し眞我と致一し猶進んで阿彌の目的に協力して終局に歸趣す

絕對主體と絕對客體とは同一理性の兩方面なり。天則秩序の理性には絕對主體。歸趣の理性には絕對客體と現はる丶。絕對主體は歸命の理性の個體、絕對客體は所歸の客體、同一性の二方面なり。

阿彌は絕對無限にして相待規定の原始根底にしてまた世界を統一し擔保する絕對主體にして終局目的には一切に眞理の自己に歸趣の光を與ふる理性なり。斯の如きの理性なるが故に世界及び衆生の依屬し歸命すべき性能なるを識る。是よりは阿彌の本質性能を研究せん。

體質

本質即實體は絕對にして自己即ち絕對なり、一切相待規定の存在は自から實體に非ずして絕對に依て實體とす。實體は他に依るべきものに非ず。相待的なる者は因果相待

にして生滅變遷常なく又種々異質混雜す。實體には生滅變易有ることなく、また差別の相あることなく、本無定相にして一切の定相を生ずべき無規定なり。實體本質と顯動態の世界現象とは分離すべきに非ざるも、純粹なる本質の概念を明了にせんには實體本質に消極的と積極的との兩方面あることを知るべし。先づ純粹の本質を明さんには觀念的に之を觀ぜざるべからず。

絕對阿彌の本質は眞空卽ち精神態、虛妄念慮に非ざるか故に眞心と云ひ非物質の故に空と云ふ。卽ち自中存在永恒精神態なり。絕對本質は本來本覺眞心永恒自存精神態卽ち無限光壽なり。消極の方面としては超空間超時間超物質にして其活動としては遍時間遍空間徧活動態なり。積極に表明すれば無限光壽、永恒自存精神態なり。

自存とは阿彌本體空間に內に非ず外にあらず中間にあらず自己絕對の實體に實存する一切空間を現出する活動の主體は空間態の實態にして自己の中に精神態卽ち觀念的に存在せり。絕對無限壽命卽ち永恒自存なり。

實體は絶對にして時間の形式を超ゆ。過去に非ず現在に非ず未來に非ず、三世當念絶對同時態なり。

精神態とは個人の念慮に非ず不識的非物質の精神。また凝然眞如に非ず、一切活動の本體にして永恒自存の絶對的なり。

空間時間の形式より及び一切を産出實現し活動せしむべき本體たり。

無限壽とは永恒自存是絶對無限にして實には無限にも有限にもあらざる同時態にして本體なり。自己致一の内容は不變にして常寂光土の安靜なる清淨世界ありて之を現象世界の衆生劫盡て大火に焚るも我此土安穩にして慧光照無量壽命無數劫とは絶對無限壽永恒態を云ふ。

無限生命とは一切活動の生命なり、十方無量の世界に於て宗教的活動は絶對無限の阿彌の神的生命なれば何の時何の處に於ても離るゝことなきが故に恩寵によりて安立すべき一切衆生の神的生命として活動すべき絶對的生命を無限生命と名く。

十方一切衆生の神的生命は絶對の生命と分離したるものに非ず、壽と命とは精神本體と勢力また形式と活動なり。無限光壽の本體の中に在て衆生は自から迷て天然世界のみを實と計す。深く觀念的に世界の眞相を觀見すること能はず、若し天然を超越して觀念的に觀する時は吾此土安穩にして天人常に充滿す。此世界を斷盡して而して後に彼岸に無限の光明世界を求むる如きは眞理に非ざるなり。そは圓具の眞理に非ざるなり。そは圓具の眞理を體達すること能はざる人の爲に別教的に直に圓具の淨土を說かざるは暫く權門の假設のみ。無限の永恒壽としては絶對依屬すべき依止する處にして無限の生命としては一切處に於て神的活動の生命と爲る。本體と活動態とは一切處に周徧せる眞心態の故に法界身と名づく。一切の處一切の時に於て阿彌の中に存在す。また其生命の存在せざる處なき故に阿彌に離るゝ處なし。故に經に如來是法界身入一切衆生心想中と。然れども法界とは物質存在に非ざるが故に天則規律の物的に阿彌を發見せんと欲する如き誤を捨ざるべからず。故に阿彌を觀せんとせば其本質に適した

る三昧觀念的に佛知見開示して初めて觀見することを得べし。

無量光

光明とは知と慧を表明す。無限光とは絶對の一切知力にして絶對的眞心の一切知力態は一切を統一し擔保する勢能にして、知としては天則秩序の理性態なり。慧としては歸趣の理性衆生を開展する慧なり。一切知と力とによりて世界的衆生を包括して遺す處なき力なり。此一切知態が天則世界秩序として一切衆生及萬法を統一し規持する秩序として一切の萬法の無量なるは此統一的秩序によつて軋持せられざるものなく、天則秩序は盲目的因果律の流行に非ずして精神的一切知と能力との勢力によりて統一し規持すべき理性あるが故に、天則秩序は阿彌の法身の知と能との規律なり。此の統一秩序より出たる衆生は是等に理性的規律によつて動くべき理性を附せり、之を佛性と名づく。一切衆生悉有佛性とは是なり。また天則秩序とは世間に準したる語を用ゆ是

れ法身なり。法身とは絶對の精神的規則天則秩序として一切を統一し擔保する處の理性なり。

此理性に一切知と力とありて天則秩序の衆生の理性となりて歸趣の光によりて開展すべき豫地を準備せり。

絶對無限の一切知と力とは天則秩序の眞理とせば一切は之に統一し擔保せられざる衆生なきを識る時は孰か之に歸命信順するの理なるを悟らざらん。殊に此理性に順て動くべき理性付せらるゝに於てをや。衆生は天然規律の内に阿彌の知能によつて産出せられ統攝せられたる理性あるが故に、衆生は天然の生活にも不識に道徳的行爲世俗的道情感情的道法の如きは此規律より出たる理性に外ならず。

阿彌は一切衆生に高等に開展すべき理性を付したる上は之を終局に歸趣すべき力を與へざるべからず。

無限光明とは歸趣の光り即ち一切慧態なり。

阿彌は世界一切を統攝擔保するのみに非ず、一切佛性を開展して終局目的に歸趣すべき性能あり。是を一切慧また表語に無限光明と云。此一切慧態は絕對的理性にして一切處に存在し一切衆生の佛性を開展し自己に致一す。此歸趣の理性に攝取せらるゝものは理性は天則秩序の理性よりは高等なり。衆生は元來開發すべき理性有す。阿彌の本願と云は絕對理性に一切を開展すべき性能を有す、大原談義佗力の實體と妙用の中に論せる如き本願の形而上論と云ふべし。

阿彌の本願力と云は理論に說明せば阿彌の本質理性に一切を開展して自己絕對に攝取すべき理性と勢力を宗教的人格的表語に表したるに外ならず。撰擇本願といふは終局目的に開展せられたる衆生心は天則秩序の理性のみに非ずして高等に開展せらて歸趣の理性に攝取せられたるものは已に天則の中より選擇せられたるなり。

歸趣の理性とは阿彌の一切慧なり、阿彌に對する觀念は智力には佛知見の啓示とし心情には解脫融合意志には靈化菩提心として神的生命に入りて活動するは阿彌の歸趣の

理性の中の生活にして自己を離脱したる精神態なり。

光明と壽命

光明と壽命とは本より精神態にして天然機械的世界觀のとは簡ばざるべからず。されば天則的世界秩序も此絶對の法身を離れては一切有ることなしと識るべし。宗教解脫靈化の必要に出たる客體の觀念には、絶對精神は世界一切の依屬すべき本質性能なるが故に光明とは精神的光明、一切智と一切慧となり。智としては天則秩序の理性とし、慧は歸趣の光即ち一切を開展する理性と爲す。壽とは本體の永恒自存にして命とは永恒不斷に一切世界の活動態の生命と爲。

光明を離れたる壽命有ることなく光明、壽命を助成し壽命は光明を發す、空間と時間と離るゝことなし。光と壽とは時間空間の形式の實體にして明と命とは空間時間内に存在活動する本體勢力の主體たり。

所歸の本尊

本義に歸命する所の本尊を總じては三身一體の如來別して歸趣の本尊は無量光壽本願攝取の彌陀如來とす。三身一體絶對無限の如來は大日彌陀釋迦三身一體の三方面、法身としては大日、報身は彌陀、應身は釋迦。是體相用の三面にして、一方を擧ぐれば二面を具す。故に大日の三身とも、彌陀の三身とも、或は釋迦の三身と云ふも理に於て異るに非ず。大乘圓教に於て談ずる所の三佛此は三身三佛名は異なるも本體は一なり。大日の名は密教に於て本尊を總稱するの號にして通じて諸大乘教に顯れざるが如し。亦釋迦の名は多く應化の身に就て其の受生の姓氏を取りて釋迦と云ふ。應身即法身の身なれば釋迦即無量光壽なり。故に釋迦の名を以て彌陀を稱するは理に於ては難ずべきにあらざれども古來和漢の高僧知識大乘佛教の本尊は彌陀の名を以てす。即ち彌陀釋迦一體なれども證の人と所證の尊法となり。

釋迦の心靈は即ち無量壽無量光の彌陀なり。若し彌陀の尊法を離れて釋迦如來なし。釋迦如來能證の人を以て此忍土に彌陀の光明を實現せしむる事は忍土無明の永に眠るもの直接に彌陀の日光を觀ずること能はず。釋迦は彌陀の日光を反映し月光に由りて常住存在の彌陀を信知することを得。

釋尊は常住の彌陀に歸せよと敎勸し給ふ敎主にして、彌陀は釋迦の敎へ給ふ所歸の本尊なり。

自力敎なれば敎主即本尊なり。先覺者の敎主を仰いで自ら敎祖の規範に則り釋尊の彌陀を證し給ふ如くに自己も亦無上の光明を證す。然るに吾人は敎主釋尊の敎に隨て彌陀を念じ其の本願の光明に攝取靈化せられて同體の證を取る故に攝取靈化の尊體に直接に信歸念持して光明を獲得す。

無量壽經序に示す如くは敎主釋尊は常住存在の彌陀の靈光に充されて光顏妙容を現はし一切萬德は悉く彌陀の日光に反映する月光なる事を示し給ふ。而して一切衆生悉

く彌陀の日光に由らざれば解脫正覺の道なき事を教へ給ふ。

大乘佛教の釋尊は全く宇宙全一の光明なる彌陀の忍土分身現なる事を明すなり。天台止觀に一切諸教中多讃彌陀亦た以二彌陀一爲二法門主一と云ふが如し。

又大乘菩薩の代表者たる文殊普賢も彌陀を以て歸趣する所の本尊とし永遠の歸着は無量光刹にあり。文殊發願經及び普賢行願品見るべし。

又大乘佛教の中興龍樹及天親同く釋尊の教に隨て彌陀を本尊とす。漢土に於ては惠遠法師曇鸞法師の如き南岳天台の如き杜順法藏の聖者の如き中華佛教者の龍象悉く彌陀に歸して最終の本尊とす。高僧傳披見すべし。我朝にては聖德皇子行基僧正慈覺慈惠源信永觀等の高德多く彌陀に歸す。元亨釋書本朝高僧傳等に出づ。

西洋の學者は小乘佛教の本尊は釋迦にして大乘佛教の本尊は彌陀なりと認定せるが如し。

小乘教は現實を尊ぶ故に印度實現の釋迦を本尊とす。即ち現實の世界外に宗教の對

象を求めず。大乘教は高遠なる理想の要求に應じ宇宙全體に亘れる獨尊統攝歸趣の本尊を立つ故に無量光無量壽の如來を以て歸命信賴の對象とす。

歐米の好佛學者が小乘佛教の釋尊本尊にては耶教に比して未だ滿足せざるを以て大乘佛教の彌陀本尊を提出するが如きは理想の進みたる宗教者の爲には止むを得ざる處なり。

高尙なる宗教意識の本尊は其對象を地上人身に求めずして宇宙全一の絕對的偉大な力を有せる彌陀如來なりと。而して其宇宙全體の無比獨尊なる神尊が此地球に分現して地球上唯一の聖人たる釋迦と爲。釋迦を宇宙的大にすれば彌陀彌陀を人體に現ずれば即ち釋迦釋迦彌陀は一體の異現に外ならず。法華壽量品には能證の釋迦即所證の法と本一體なり。所證の法即ち慧光照無量壽命無數劫なる彌陀なるが故に能證の釋迦即是彌陀なり。而して大乘經の本據たる所證の心を釋迦として釋迦の壽命は無量壽なる事を明したり。

若し能く釋迦を人體に認めずして證得の心に重きを置きて釋迦を見れば釋迦即ち無量壽にして直ちに釋迦を以て本尊とするも理に於て非ならず。然れども初心まぎれ易し。故に能證の人を釋迦とし即ち教主として所證の尊法を彌陀とし本尊とするは人をして誤無からしむ。已上理に就き歴史的に大乘佛教の本尊を彌陀とし教主を釋迦と定む。

能證の人と所證の法

能證の教主を以て本尊とすれば所證の法は自ら具有するなるも能證教主の名大乘小乘共に同じ。釋迦を本尊とすれば小乘と何の選ぶ所かある。故に同名の釋迦は所證の法に於て大小天地雲泥の懸隔あり。さればにや蓮師の如きも釋尊所證の大乘妙法蓮華經を以て本尊として大乘教主を現はす。

故に蓮師は法華經を以て本尊とす。是法本尊なり。法華經の本體は即ち眞理の光明

は永遠に常住なる活ける如來なりと云ふに歸す。此の宇宙全一絶對的偉大なる力ある妙法にあらざれば一切衆生を闇黑より救出する能はず。此の妙法は常住なり三世諸佛も斯法に由て成佛すと。

佛本尊

常住に活ける妙法と云ふも無量壽如來と云ふも同體の異名。宇宙の本體を唯理唯心なりと云ふは實は哲學的の術語なり。同一本體を光明赫々たる靈妙不可思議の力ある神尊なりと尊崇するは宗教的名なり。

妙法蓮華と法身無量光佛とは同一異名なれども妙法は多く眞理の名。其の眞理を主宰するを佛と云ひ攝取本願の力ある如來と歸命信賴するは宗教的他力的なり。妙法を證得するとは自力的の名詞なり。故に本尊の名稱は永遠常住攝取本願の如來なりと定む。

釋迦彌陀を他教の例

現今文明國と稱せらるゝ歐米に行はるゝ處の耶蘇教の教祖及び本尊の神に、彼教に於ては教祖即ちキリスト即神と云觀念キリストを離れて神を見ること能はずなど唱導するもの無きにあらず。蓋しは神を見るに猶太教等の異教にも神々と云者ありしに撰びてキリストに依て愛を示せる神と云ふことを愛なる神と戒律の神とを區別し易からしめんが爲めにキリストの父なる神と云ふまでのみ。即ちキリストが全く眞の父として歸依信賴したる神なりキリストも毎日父に對して祈禱を捧ぐ、天に在ます我等が父よと是を主禱文と云ふ教主キリストが常に親しく認めたる處の父なる神是父なる神は獨り子を使はして一切の人類に愛の深きことを示すと。

若し天に在ます獨りの神なくばいかでかキリストなる聖者世に出づべき理あらん。釋尊は彼のキリストに比すべき教祖なり。キリストは父に禱り父を讃美す。吾釋尊は

威神光明最尊第一なる父なる如來を讃歎し給ふことキリストが天に在ます父と云ふに同じ。若し天に在ます父を離れたるキリストは有ることなし。若有りとせばそは實のマリヤが分身たるキリストにして天の父より生れたるキリストにあらず。釋尊も又然り常住永遠の光明なる彌陀に依りて實現したる釋尊こそ眞の佛陀なり若し佛陀の分身たる釋尊にあらずしてマヤの所生たる實質のみならば眞の佛陀にあらず。大なる神を現はす爲めのキリスト大なる如來を示す爲めの釋尊にして、キリストを只模範として我等もキリストが神を信ずる如くに信せんと云ふ者さへあるは佛教に釋尊を離れて只彌陀を信ずる眞宗等あると相似たり。

キリストは地球の神にして父なる神は宇宙の神なり。釋迦は忍土の佛陀にして彌陀は宇宙の如來なり。

彌陀とキリストの神とは同體の異名、絶對なる神に別體あることなし。但し衆生が神に對する觀念に差あるは宗教意識の程度の然らしむる處なり。

佛教は汎神論的宗教なれば一切衆生悉有佛性、すでに佛性顯現すれば悉く是れ佛陀故に高等なる多神教なり。

多神教なれども彌陀は佛教にて多神の中に獨尊統攝歸趣の義ありて彌陀はまた一切佛陀に對して最尊者又是等の諸佛を統攝す。一切萬行の趣く所なりとす。故に汎神的一神教なりと爲。

世界諸教の中に於て最も發達せるは彌陀佛教なりとす。

無量光壽

大御親に在ます如來は絶對的唯一宇宙全體即本有の如來なり。天地萬有の本源、十方三世一切諸佛神明の本地なり。一大事因緣經に久遠實成本有法身常住無量壽佛是なり。本有法身如來は無始無終本然自性にして色心無碍一體の大靈體に在ます。

一大法身如來、絶對の大靈力不可思議の業より衆生を常樂涅槃界に攝取せんが爲め

に報佛因果の身を現じ給ふ。因位には法藏比丘として無量の大願を發し迷沒の子を如何にして救度すべき哉。衆生無明を開き法性常樂の涅槃界に攝せんには、實に難中の難事なり。善巧の方便五劫に思惟して、迷沒の衆生を無爲涅槃の常樂に歸入せしむるの妙案を得たり。

自ら無量光明無量の壽命諸佛稱揚の靈體を現じ妙色莊嚴の國を示して聖名に體を徵ましめ阿彌陀の名字に即無量光と無量壽を徵し至心に歸命して自己を投じて阿彌陀如來に歸入する時は、衆生無明迷沒に在れども其根底の心源は是法身の分子なり此佛性衆生の心源に潛在す、無量光の名を聞き名に就きて潛在の靈性が無量光に開發せられて自己の靈もまた無量光と合一するに至る。無量光に合一する靈體は即ち永劫本然の無量壽なり。無量光の空間と時間の無量壽とを發得する時はすでに精神の形式に於て如來と一致したるなり。

內容としての無量光壽は現在を通じて盡未來際向上して佛心佛行を果すなり。佛數

の中に就て或宗に於ては菩薩の萬善萬行を階級を悉く經て而して後に成佛すと。斯の宗の意は然らず佛子に疾く無量光壽の佛心として永恒に佛行を爲さしむる全如來の本願力を得れば自己がすでに如來に投歸して從來の迷妄の我を沒して大我の無量光を自我の中心となすが故に全く本願の眞意義を得れば我は絕對無限なり。靈我また大我なり。此の大我には彼此の相待を離れて絕對的に大我なり。

此の眞理を悟りたるを無生忍を證得すと爲す。然る時は形式に於ては彌陀同體なり。即ち本然常住の涅槃を證したるなり。然れども此に於て能事終れりと謂ふは甚だ誤謬なり。是より實地に無量光と無量壽の眞實を彰はすなり。すでに證得したる無量光は盡十方の空間を盡したる靈體と合一したるも、已後の無量光は、數量に於て、若くは色法心法一切の萬法に於て無量無邊なり。此無量の法には各其自性の理を有す。一切の無量の事々物々の眞理を悟るを事の無量光と云ふ。無量は一切萬法に名け光明は萬法を悟る智慧に名く。智慧に眞理を認識する智と又實行を照す智慧とあり。此の兩面

に在りて照す處の智慧を云ふ。壽とは生活々動の義または實地の行爲の義なり。即ち光明の中に佛行永遠無窮に行ふを無量光壽と云ふ。

涅槃界に無量の常樂我淨四德の莊嚴また無量なり。宇宙全體深秘の涅槃常樂の都なれども衆生無明に迷沒して知見すること能はず。若し無量光を得れば無量不可思議の五妙境界の莊嚴も悉く知見することを得。若し一光を得れば一の事法を知見し二法三法乃至百千無量の事々物々善く知見することを得ん。

光明を得れば之を實行す。即ち壽命なり。宇宙は自然界も心靈界も娑婆も寂光も悉く無量光壽の顯現ならざるはなし。若し此の無量光を得れば一切の眞理を悟るべし。あゝ不可思議なる哉無量光壽。親の物は子の物なり子として何ぞ讓與せられざるべけんや。

法身無量光と現身佛

宇宙全體が色心無礙の本有法身常住無量壽佛に在ます。本有實成の法身無量光は盡虛空徧滿の靈體に大智光明不可思議の業力と不可思議佛身不可思議の佛土不可思議の莊嚴を以て法界に充滿すれども、絕對を背にして相對因果の世界に約束せられし衆生はこれを知見し享受するに由なし。こゝに於て法身無量光より人中に法藏比丘を現じ、無量の願を發し衆生の爲めに佛身佛土莊嚴の行を起し善巧方便の寶鑰を以て本有無量光明の涅槃常住不可思議の佛身佛土無量の莊嚴界を開きて、衆生を涅槃常住界に歸入せしむ。此處に於て人中所現の法藏比丘は十劫正覺の曉には涅槃常樂界の門を開きて盡十方無礙光如來と現じ、即ち天佛となり、心靈界の太陽と現じて普ねく十方世界を照し念佛の衆生を攝取し給ふ。迷子の爲めに本有常住の四德莊嚴の涅槃なれども無明迷沒の衆生未だ門を開かざる間は名をだに聞こくとなかりき。故に無量の願行より新たに建立せし莊嚴淨土と說きしものゝ其實は久遠實成本有の涅槃の靈城なり。

心靈界の太陽と現じて慈悲と智慧との光明普ねく法界を照して念佛の衆生を待ち給

ふ。無量光如來は即ち本有法身不可思議の靈力より現じたる靈體なり。之を報身と云ひ靈界を報土と云ふ。即ち是れ天佛なり。天佛は常樂の天界にありて光明普ねく照し給へども地上の衆生は自ら知る心眼なし。

こゝに於てまた報身無量光より三展して地上の衆生の爲めに應身佛を衆生に應用して人佛を現じ給ふ。即ち教祖釋迦牟尼是なり釋迦此地上に出で給ひ出世の本懷大悲の聖意より報身無量光の德を讃歎し一切衆生を歸せしめぬ。

衆生に示すに光明名號報身如來の本願なれば光明名號を緣じて如來の光明に攝すべき眞路を教へ給ふ。彼は天に在して靈光常に照臨して衆生に待し此は人佛として地上に出で人類に教るに光明の因緣を以てす。故に善導大師曰く釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎此遣彼喚豈可不去也と。大御親の大悲實に深重なり。天には報佛無量光如來として光明十方界を照して儼臨し地には釋迦佛として天に在ます。超日月光如來を指して歸せしむ。

淨土の無量光地上の釋迦其源は本有常住無量壽佛の垂迹なり。一大事因緣經に法滅比丘無量の大願滿足すと說くと雖も其實本有久遠實成本有法身無量壽佛なり。乃至其本有常住無量壽佛とは豈異人ならんや。今日世尊釋迦牟尼是なり。絕對界に本有法身無量壽佛と云ひ、相待世界の衆生を攝取すべき淨界に現じては天佛報身無量光と云ひ、地上に出でゝは人佛釋迦牟尼と名く。同體の種々の示現身にして通じて吾人の大御親なり。即ち如來性の佛身を因果的世界に現じたる佛身と衆生身に應じたる佛身となり。

彌陀は淸淨佛界の釋迦にして釋迦は地上の彌陀なり。釋迦が宇宙最高の佛身佛土を現ずる時は即ち彌陀身土となり彌陀が人身を受くれば即釋迦なり。釋迦と彌陀とは一體の異方現身。彌陀は靈體勝妙の法身を以て淸淨法界に現はれ、釋迦は肉身を以て人界に出づ。

彌陀の力用、彌陀は心靈の太陽なり

本有法身無量壽佛は不可思議の力用より一方には太陽と現じエネルギー即ち力能を現じて所屬の惑星に普及す。即ち現に地球の一切植物の生産成養も太陽より常恒に發射する力に由らざれば一本の草だに發生すること能はざるべし。自然界の物質に於ける太陽の力を以て物的の動植物を生成する如くまた法身は一面心靈界に廣大無邊の報身盡十方無礙光如來を現じて普く十方の法界を照して一切衆生の心靈を靈育す。太陽の力は光熱化の三線を以て一切の生物を生養するに例すべき靈界の太陽とも名くべき無量光如來は智愛化の三光を以て衆生の心靈を靈化す。太陽の光線にて物界に明を與へて物を見せしむる如く如來の智慧の光は衆生の心眼に對して靈界の眞理を知見せしむ。又熱線に比すれば慈悲を以て衆生の苦を拔き樂を與へ又衆生をして慈愛心を起さしむ。次に化合線に例すべき如來の靈光は能く衆生の煩惱惡質を解脫し靈化して正善

なる意志とす。是三能は人の智力感情意志の三面に對する靈力なり。故に報身は靈界の太陽なれば其力に由らざれば靈活々潑の信念を生ずるに由なし。法身無量壽は此報身を現じて衆生の心靈を生成す。密敎に大日如來が衆生を攝取同化して成佛せしめんが爲に加持身を現ずとは即ち是れ報身佛の異名なり。加持身とは大日如來が行者の三業に對して身口意の三輪を加被し加持身と行者の三業と神秘的に入我々入融合一致する時如來の增上の力を以て衆生の心靈を攝取同化して行者を加持成佛せしむるなり。

彌陀淸淨天に在して照臨して衆生を攝化し釋迦地上に在て人を敎へて度脫せしむ。基督敎の天に在す父と地上に出し神の子キリストに比例すべし。

大御親と共に住す

吾人が瞻仰する所の大宇宙を通じて全體是れ吾人が仰ぐ所の大御親の身心に在ませり。宇宙全體が如來の御身にしてまた如來の精神に在ます。吾人は宇宙全體を通じて

絶對的なる如來を信せざるを得ず。全體が身にしてまた如來心なり。全體が如來心なるが故に、宇宙は如來の大智慧光明の至らざる所なし。また如來大威神力の存在せざる所なし。吾人が見る所の天地萬物日月星辰一切萬有も悉く如來心身の現象ならざるはなし。如來の本體は一體にして而も一切なり。實に不可思議にして不可思議なるものは如來に在ませり。自然界の萬有も如來心を離れて有ることなし。一切の動植物いかに微少なるも如來心を離れたる者有る可けんや。微少なるものは微にして亦不可思議なり。宇宙の大なるは大にして亦不可思議なり。宇宙は如來心靈態の故に實に深玄なり。吾人が肉眼を以て視る處のものは或一方面に過ぎず。若し心眼を開きて見る時は、此處が即ち常寂光土なり。宇宙を盡して蓮華藏世界なり。これ重々無盡の妙色莊嚴界なり。また大日自性法界宮なり。大毘盧舍那如來無量の法身の菩薩の爲めに常恒に說法し給へり。此處が即ち西方極樂世界なり。彌陀如來常に法輪を轉じ給ふ處なり。大日と云ひ彌陀と云ひ唯一の大御親の異名に過ぎず。敎祖釋迦牟尼また大御類の應化

身なり。娑婆に垂れたる迹は小なれども其内證の本地は卽法身無量光なり。無始無終の本佛なり。實に不思議にして不可思議なる大御親の御權能なり。我等斯の大御親を知らずして六道に輪廻せり。

宇宙は全體娑婆世界にして而もまた常寂光明土なり。娑婆卽自然の衆生界も無邊なれば佛界も亦無際なり。生死界も無盡なるが故に涅槃界も亦無盡なり。宇宙は如來大心界なれば一塵の色相あることなし。また宇宙は如來大心の妙境界なれば十方三世に亘りて重々無盡の佛身佛土の莊嚴ならざる處なし。愚童の我等さへも慧眼を以て觀ずる時は十方を盡して一塵の立なし。若しまた法眼を以て視れば十方に勝妙五塵の色聲香味觸の妙境莊嚴ならざるはなし。

吾人は金剛經が色相を以て佛を見るの非なるを呵嘖するの眞理なるを諦信すると共に淨土經に說く處の勝妙五塵の淨土の莊嚴の眞實なることを確信す。是二經の所說相互に映して大御親の眞空妙有の妙を示し給へり。若し單に一方のみを偏依する如きは

未だ大御親を全く信ずること能はざるものなり。實に如來大心の眞實不可思議を悟らざるものは、空と云はゞ空に墮し、有と云はば有に偏す。これ如來眞空妙有の眞理を會得すること能はざるものなり。

大御親の聖意の現れたる清淨佛土は法界に周徧すれども衆生自ら知らず。唯穢惡充滿の娑婆とのみ感ず。

若し大御親の光明に靈化する時は如來自性の境界たる靈砂不思議の清淨界を感見することを得ん。宇宙は實に甚深なり。吾人の精神亦不思議なり。是大御親の分子なり。分子開發すれば全體と合一す。靈性開發する時は大御親と共に分に清淨國土に安住することを得ん。靈界を實驗することを得ん。如來は全體一大心靈として法界に周徧しまた妙色莊嚴の佛身佛土として法界に充滿す。若し此の說を聞いて疑はざるものは如來の眞理を領會したる者なり。此れ眞實なり。慧眼を開きて實驗せられよ。

吾人は大御親と共に行住坐臥に離ること能はず。

彌陀の佛格

如來アミダはいかなる佛格なるか從來アミダ佛を說くこと區々たり。或は法身のミダあり或は報身のミダまた應身のミダあり、また眞如身のミダ或は神話的のミダ或は擬人的表式の一隅に置くミダあり、或は厄病救除のミダまた冥土の福祉を與ふるミダあり。

また自然の因果律を宗教化したる酬因感果の人格的佛身の說あり、古來彌陀の說また彌陀に對する觀見の區々である。吾人は、彌陀は大乘佛教中最も宗教的眞意の本尊として信じ來りし。彌陀は本來宇宙唯一獨尊絕對的威力ある靈格を稱するものなれば其實體に至つては不可說である。なれどもそれに對する觀念の種々に異れる所以は機見の區々である。即ち宗教的意識の階級によりて其對象其觀念の異なるは他ならず、佛教の眞理は本來異るものにあらず、然れども機類に隨て其理を示すに相同じから

ず。

天臺が佛教を判ずるに藏通別圓の四教を以て判剖する如く、彌陀に對する觀念もまた然り。幼稚なる原始的宗教の爲には彌陀は現世幸福の守護神たるものと信じまた超然未來の幸福主義の爲には彌陀は未來の福祉を與ふる神と信じ、また神話傳記固執主義の爲にはそれに相應したる傳說を以て彌陀を信ず。

本來彌陀は絕對的偉大の力を以て一切萬法を統一する靈力なれば、宗教的信念に對する感應何れかそれ彌陀の靈驗ならざるものぞ。しかれば蓋は唯彌陀の一分を信ずるに止まりて彌陀の全なるにあらず、彌陀の不了教藏通別教の說たると同じ、いまだ了教圓滿の觀にはあらず。苟くも宗教的意識の客體なる本尊には獨尊統攝歸趣の三義備りて初めて本尊とし絕對的の歸命信賴も成立すべし。故に吾人の信ずる處の彌陀は法報應各別にあらず、三身一體の彌陀、本有無作の實體たると同時に一切因果の法則を實現するの大原則にて、本然自性無始無終永恒活存の靈體なれば無量壽と曰ひ、また

法界十方に徧滿し、一切の時一切の處を普く照鑑して一切を救濟す故に無量光と名つけ、十方三世諸佛神明を統括する尊體の故に無量尊と號く。

故に楞伽經には十方一切法報應化佛一切菩薩等は悉く彌陀佛國より生ずと。實を尅して論ずれば宇宙間一切萬法を貫き眞理の存在するは是永遠無量光にして自然界にも心靈界に亘りて一切の生々存在は悉く無量壽の顯現ならざるはなし。

彌陀本來絶對的眞理にして相待分別の人間の設の爲に左右せらるるものにあらず。大活眼ある者には活ける彌陀の大身心顯現し分別固執の輩には分別分身の彌陀を信ず法眼開く時は天體無窮地上の森然一として無量光の照さざる處なし。一切萬物の中に在りて神光輝く萬物のみにあらず、人格の無量光の活現せる釋尊はいはずもがな、孔子、キリスト、マホメット等の聖賢悉く彌陀の活現に外ならず。

彌陀は法性身本有無作の實體なれども衆生を度せん爲に方便法身を出す。即ち法藏の發願十劫正覺の佛身是なり。方便法身により法性法身を顯はすと、方便法身十劫正

覺は即ち本有無作の無量光を世に示さんが爲なり。

大經は方便法身を說示して本有自然の無量光を顯す。故に吾人は方便法身を信ずると同時に法性法身を信ずる也。

二種法身

問、如來の法身はすべての色相に超絶し無色無相なりとも聞き侍りけるに、または法身相を具すること三十二等の聖文處々に說きたまふことこれいかなる故ぞと。

答て。三昧の鍮を以て淨土の門を開き、如來の法身萬德圓滿のいと麗しき相好及び淸淨國土の相を見んと欲せば、先づ須らく如來の本質はいかなるものなるかを知らざるべからず。今如來の法身を識らんと欲せば二種法身の理を解すべし。而して後次第して淨土に在すいと麗しき相好法身を拜むべし。

今聖曇鸞の論註によりて二種の法身說を暫らく解說せん。請ふ聽かれよ。曰く如來

に二種法身あり。一には法性法身。二には方便法身となり。法性法身より方便法身を出し、方便法身によりてまた法性法身を顯はすと。蓋は如何なる理由なりやと云はんに、法性法身とは、本然自性にて即ち自性天眞佛とも本覺の如來とも名づけて、始もなく終りもなき本有自存の眞神にまします。之を學語にて云はば眞如法性等の名をもて其性質を詮表しまた實體實在などの名詞をもて詮表す。是性質より云はばまた宇宙精神とも云ふべきなり。

此永恒自然の本覺の如來の實體は本より已來本有常住にして一切の萬德本自具備し玉はんも、ここに一度迷て無明に迷沒する衆生にはこれを知見するに由なし、衆生は此を知らず自ら生死に流轉せり、凭る無明に迷へる衆生の爲に本覺法身の一大靈力即ち大自在の力より萬德圓滿の性德を現はして八萬の相好無盡の光明もて普ねく十方法界を照して信念の衆生を攝取して本覺如來の終局目的なるネハン即ち常住平和の淨土に引接し玉ふを方便法身とは名つく。

詳說せば法性身の如來は宇宙に周遍せる一大心靈態にして本無色無相にてすがたも形も超絶したる靈體にましませども、即ち無相と云も消極的の遍空の無相にあらずして積極的の無相にてあれば、無相は相として具せざるなき相なり。

本覺如來は法身大智慧の光明體にして一切處に周徧せる實在にましませども自在無碍の力より一切の無盡の相好身を現じたまふ。

若し本覺の如來は無色無相なればとて一切無盡の色相莊嚴の相をもて實現すべき德性が存せざらましかば、法性身は實在の德性が缺けたるものと云ふべし。

無相の實體より無邊功德の莊嚴身を現はし方便法身と曰ふ。方便法身とは一切衆生を本覺の都に歸趣の道を明にせんが爲の光として世に實現したまふ尊相なり。

これを方便法身と曰ふ此の方便法身の萬德圓滿の相好を瞻仰して衆生がこの感應力によりて自己の心靈が開發し心性開發し來て觀する時は、色相莊嚴の方便法身は本來無色無相の本覺法身と同一本體にして一切の相を絶超したる眞法身なるを識る。妙色

莊嚴の方便身を拜してそれが爲に衆生が無生の眞理を悟るが故に法性法身を知見す。衆生は此方便法身の誘引によらざる時はつひに法性法身を悟得すべき理あることなしこれによりて方便法身より法性法身を出すことは盡すなれ。出すとは方便身の紹介によりて法身を見出すことなり。

例へば宇宙の大虛の實體に太陽を實現すべき一大能力あればこそ現在の太陽を現出すなれ、太陽によりて宇宙の實在には憑る能力の存在を認むる已上は、能力の實在が無くてはならぬと曰ごとし。

今觀經に明し玉ふ、無量壽佛六十萬億の眞金色八萬の相好身、是の如きの無量塵沙の功德身は是如來一大靈力不可思議能の實現し玉ふものなり。憑る萬德莊嚴の相好身を實現し玉へばこそこれを實現し玉ふ法性法身の實在を證するならめ。

かゝる萬德妙色のすがたは現ぜざるとも、如來法身の實在は變ることなきなれどもこれを實現せざれば衆生を度すること能はざるなり。

二種の法身。法性法身と方便法身とまた大論の法身佛と生身佛

この理を起信論に明しぬ。如來は本法身智慧の身にして形も相も得べきものにあらざるなれども、不可思議の一大靈力より無量の色身相好の身また金銀マニ眞珠ルリ寶玉をもて莊嚴せる美天國に快樂安穩美妙の相をもて現はれ玉へり。而してその能現す處の本體は無始無終にて成壞の相なきものなれば、その現はるる處の色相莊嚴も隨て永恒不變にして破壞することも變し滅することも有ることなしと、故に如來の境界甚深なり。慧眼なき凡愚何ぞそれ思議すべけん。

法性身と方便身とは本より二體あるものにてはなく、方便不思議の妙色莊嚴の相は法性本體の上の用相として現はれしすがたなり。無量莊嚴の色相が即無相の實體なり無相の實體と無量莊嚴の用相とは一體の兩面なり。さればこそ法性身の實體と同じく所現の色相も永恒に現顯して變易なく破壞なきなりと。

起信論にまた問を起して、法身無相いかがして相を現すやとの答のこころに、如來

法性身の相は大智慧の象にして本相なきこと譬ば鏡の體の如し。本來宇宙は一大觀念體の大なる圓鏡の如である。宇宙が精神の大圓鏡なれば衆生の信念に隨てそれに應じてその反映として種々の相好莊嚴の妙色が顯現するものなり。鏡體本相なきものなれども、これに對する人に對して其面影を映現す。

法性法身の大圓鏡もまた是の如く、法界は無形の精神態の靈智鏡に無量の形相顯現し重々無盡不可思議なり。

若し宇宙が本來如來の法身智慧の相にして大圓鏡ならばいかゞして吾人は其智慧の鏡の中に在りつゝ其の相好莊嚴を拜見することが能はざるべきぞとの答に、そは疑問の如く法界本如來智慧の鏡に相違なきも、その鏡に塵垢ある時は、其影像を映現すべきなし。若し鏡の塵垢を拭去る時は忽に其影を映現すべしと。

吾人が心性は本如來の一大靈性と一體にして無二無別なるものなれども、この肉の我が無明の爲に翳して自己眞性の鏡がくもりて本來自性の中に無盡の相好莊嚴淨土の

妙相を見ること能はざるなり。之は何故ぞとならば、如來法身大智慧の鏡は吾人が肉眼の對象なるものにあらざればなり。吾人が心眼は迷沒して無明に迷ふ故に見ること能はず、若し如來の二種法身の相を知らんと欲せばいかゞしてこれを見ることをうるやとならば、これを知見すべき智眼を要せざるべからず。

二種佛身のこと

前に如來には二種の法身ありて甲は如來の本體乙は所現の相好法身なることは已に說明しぬ。しからば能現所現何れも法身佛なることは同じ、此法身に對してまた佗方面に衆生の爲に肉體をもて世に出現せる佛身あり、之を生身佛と爲す。此二種の佛身を說明せば、智論に曰く佛に二種あり一法性身二父母所生身、是法性身は十方虛空に滿て無量無邊なり。色像端嚴にして相好莊嚴せり、無量の光明無量の音聲あり、聽法の衆もまた虛空に滿てり。此衆もまた法性身なり。生死凡夫の所見にあらず、常に種々の身種々の生處にして種々の方便をもて衆生を度す、常に一切を度して須臾も息

む時なし。是の如きは法性身の佛なり。

次に能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは是生身佛なりとす、生身佛は次第に說法すること人法の如し。又云く法身佛は常に光明を放ちて常に說法す。衆生は罪あるを以ての故に見ず聞かざること譬へば日出れ共盲者は見ず雷霆地を振へ共聾者は聞ざるが如し。是の如く法身は常に光明を放ちて常に說法すれども衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず聞ず、明鏡淨水面を照す時は則ち見るも垢翳不淨なる時は所見なきが如く、衆生の心淸淨なる時は即ち佛を見若し心不淨なる時は則ち佛を見ざるが如しと。

此二種佛身の中に法性身佛とは前の方便法身佛なり、次の生身佛とは此界の人類に相應する人格をもて衆生を度せんが爲に出玉ひし釋迦牟尼佛なり。釋迦牟尼佛は無明に迷沒する衆生に相應せる肉體をもて八相度生の相即ち肉眼にて見奉るべき尊體なり法身佛は肉眼の對象にあらずして法眼及び佛眼にて相應して觀ずべき處の相好身な

り。

經にかような說あり　此三界を離れて外に世界ありと說くは佛說にあらずしてそは外道の說なり、そはいかなる義ぞと云はば、此三界とは即ち吾人が生息せる處の無限の宇宙にてあり。此の宇宙なるものは本來無邊際である。この無邊際なる宇宙を離れて外にまた宇宙が存在して彼處に佛及淨土存在すと謂は謬見なり。

本宇宙は本來一體なれども衆生が自ら此の肉眼にてかく自然現象を感覺して居るものなれば、自家肉眼の所見が全く實在なるものと自定したるも、前に述べし如く佛眼等を開き見る時は、吾人が未だ嘗て經驗せざりし美天國は忽ちに實現すべし、維摩經に斯ることを示されたり。維經の說は五眼の項に出すべし。

佛の言く其心淨さが故に佛土淨し、諸佛がむかし菩薩の行を修せし時、其心淨かり

しために其因業に報ふて感ずる所の佛土もまた清淨にてぞありと宣ひければ側に侍する處の舍利子は之を聽きて心竊に自ら解決し兼ぬる疑團が胸中にあらはれたり、謂らく佛の宣ひし如く其心淨きが故に佛土淨しとならば今佛世尊即ち釋迦牟尼が菩薩の行を修し玉ふとき其心に於て不淨なることの在していまかく穢惡の土に於て成佛し玉ふとやせん、若し爾らざれば凭る不淨の國に在ますことはなからんものをと、

時に螺髻梵王側に在りて舍利弗の言をきゝて即ち舍利弗に向ふて宣るには、いかに舍利弗尊者よ爾はかやうな謂を作し玉ふことなかれ。いかにとなれば、我如き凡夫でさへ今此現世界を見るに其美しきこと梵王宮と異るなく瑠璃衆寶を以て國土を莊嚴するにあらずや。尊者よ仁者は斯く人間としての肉眼をもて此土を見るが故に穢惡充滿の處と見るらめ、若し斯る生得の肉眼によらずして佛慧の眼をもて此處を觀ずる時は必ず清淨莊嚴無比なるを見玉ふべきぞと。時に世尊足をもて地を按し玉ふに、不思議や曾て目擊しつゝある穢土は其影だにも遺さず、忽ちに衆寶莊嚴の美天國と化し來

り瑠璃寶地に七寶行樹めぐり地より巳上虛空に至るまで七寶の莊嚴萬物光輝を發し妙香馥郁として言語に絕せり。時に舍利弗奇異絕驚自ら然る所以を解せず唯呆然たり。時に世尊舍利弗に告曰はく舍利弗よ爾及び諸の衆生自ら業力によりて現に穢土を見る我は常に微妙莊嚴の淨土に安住す、如來は常に淨土に在ます。

如來が安住したまふ淸淨國土の中に於て衆生は不淨なる瓦礫荊蕀の國土を感ず。しかれば吾人は佛陀の淸淨なる美天國中に在ながら、いかにせば其美天國に入ることを得んとを得ん。とならば寶鑰あり。

本塾典に明しませる六十萬億の夜摩檀金の色に白毫の玉彩は妙高の五峯を合せ靑白分明なる眸りは四の蒼海に比し、烏髭は高く靑天に碧を添たり。廣々たる珂雪の齒、八萬の相好は色相の極を現はし、無邊の光明は念佛衆生を攝取す。

是の如きの色相は如來一切靈力より本覺如來の性德恒沙の實相より顯現し玉ひて衆生を誘引せんが爲に十劫正覺の唱ひを示せしかども、實は無始より已來本覺の法身と齊しく常恒に十方法界に周徧して淨土ならざるはなし。しかるに衆生何故ぞ如來の清淨國土の中に在て衆生は穢惡充滿の忍土を感ず。衆生濁惡不善の世界の中に在て諸佛聖者は常寂光の極樂を觀ず。

吾人が生息する處の現宇宙を超て遠き彼岸に到りて初めて如來及び淨土を求むることとなかれ。經に云く「アミタ佛去此不遠」。淨業成者即ちこゝに在て即ち瑠璃寶地に安住することを得べし。牆を隔てずして七重行樹は眺むることを得む。

萬德の佛身は心眼開く處に現はれ、光明赫耀の淨刹は淨業成ずる處に感ぜん。

佛陀は心眼未だ曾て開けざる衆生の爲に暫らく萬德莊嚴の淨土を十萬億土の彼岸に在りと說けるも、法眼を開かしむる法を示してアミタ佛去此不遠と云ふ。是の如きの理由は能見の眼に種々あることを知らざるべからず。

能感の心機種々あるが故に所感の淨穢自ら不同あるの眞理を明らむべし。

能感の機能種々あるとは佛五眼をもて

五眼とは肉と天と法と慧と佛眼となり、初め肉眼とは即ち吾人が人類として自然に規定せられたる機能官能の眼官なり。こは解剖學また生理學に於て物理的に研究すべき器械的なり、この器械的官能が器械的に自然現象界を感見するものなり。この機械官能の功用は物理的にして恰も眼鏡に前鏡の物色を映寫すると同じ用なり。さてここに於て此器械的の肉眼なるものなかりせば日光も明輝なるを感覺せず、天火もまた炳なりと見ざらん。盲者が太陽の光明を見ざるも日光それなからんや。之と同く、人肉眼のみありて已上の四眼の境界に於ては吾人は盲者の謗は免るべからず。吾人は淨土に更生する人に對せば不具根缺の人といはざるべからず。

さて肉眼已上の四眼とはいかなる眼根にてまたいかなる境界を觀見すべきものならむ。幷を聞まほしくぞ欲ふ。

其四眼とは天眼法眼慧眼佛眼。これを前の肉眼と合して五眼とは名づくなり。

天眼とはいかなる感能の用をなすぞとならば、天眼とは天は天然即ち自然の理法なり、若し人の心意が外界の爲に動かされず、天仙の如くに從容として自然と同化し沒しぬれば、自己の精神と自然界とは本來同一體の物にしあれば、自から神通感應して自然界中に現象せるものは神通して自己の心眼に感交し來る。

かの六通を得たる羅漢がここに在て座禪の床に坐して世界中の千萬里の彼處の出來事を感見するが如き。かの天眼の一端とも云べき催眠術によりて見るも、身は東京に在て西京の事物を見るが如き是なり。斯術に於ても其修練の程度熟達の成不あり、若し能く熟達して全く自然と一致し同化したらんには、自然界の一切の現象は掌中の珍果を見るが如しと、經中の文焉ぞ夫れ怪むに足らん。しからば經に天眼をもて千萬里の彼處の細塵を見ること掌中のアンマラ果を見るが如しと。

主體の方は器械的の肉眼にあらずして即ち自然と一致したる心眼にして客體の方は

自然界に現象せる一切の色相を見るを天眼とは云ふ。

次に慧眼のことを說明せん、慧眼とは智慧の眼と云ことにて、こはやはり心眼にて其對象となるものは自然現象界にあらず、即ち觀念界である。視よ吾人が肉眼は器械的にして外界に望む時、其距離が益々遠大なるに及んでついに感覺盡て之を明瞭に見ること能はざるに至る。然るに肉眼に藉らずして吾人が自から觀念をもつて宇宙の大を觀ずる時は、宇宙は渾然として一體、彌〻心力を盡して觀ずる時は一大觀念態は法界に周徧し蕩然として一切の萬象の影は沈沒して現せず、滉瀁浩汗として大海に望むが如く、肉眼に幻現し來れる天體の無邊も悉く隱沒して宇宙無限と一體觀となり、能觀の心と所觀の界とは 然として一致し、能觀の慧が法界に周徧しこの對象となるべきもの一塵の影だにあるなし。かゝる觀慧を慧眼とは名づく。

次に法眼とはいか成る境界を感見するぞとならば、先に說明したる慧眼は一大觀念態にして萬象の影もなくただ一大圓相の如く元來無一物の體なり。法眼の對象はその

慧眼の一大觀念界中に顯現する處の靈的感覺なり。この對象を觀所成色と云如き斯聖典に示せる處の衆寶莊嚴淨土の靈象六十萬億八萬の相好身等は全く法眼所照の境界にして肉眼の對象たる感覺界に求むべからず。

若し人法眼を開き來て觀ずる時は處として衆寶莊嚴の淨土ならざるはなく如來の相好光明遍滿せざるなし。斯る萬物が光明光輝を放ちつゝある淨土の中に在ながら、法眼未だ曾て開かざる衆生は美を盡し妙を極めたる美天國の莊嚴は觀ること能はざるなり。喩へば麗日輝きをさめんとする入日の夕ある光景を肉眼なき人は之を見る能はざると同じく、吾人が肉眼の失ひる者に對してこの光景を見えざるを嘲ける吾人はまた未だ法眼なくして美天國を觀ずること能はざるなり。然らばいかゞして法眼を開きて淨土の莊嚴を觀ずることを得べきとならば。

法眼は淨業成就の心眼なれば是自然の生得にあらず、前に二種法身の中に就て法性法身は慧眼をもて觀ずべく、方便法身は法眼をもて之を觀ずべき對象なりとす。

次に佛眼とは佛陀が萬善の修行の結果として本覺の體相用と一致したる處に成就したる心眼にして佛眼は前の法眼と慧眼とを統一綜合せる慧眼にて法慧の二眼は本より何れも心眼にして其體は同一なれども其對象が甲は觀念界の差別の心象を見乙は無差別の實相を觀す、之を統一せるものが佛眼にてあれば、佛眼をもて觀する時は宇宙一大觀念界の大圓鏡に重々無盡の莊嚴法界ありて存す。

佛陀は五眼圓かに明かに自然界と睿智界とを双照し、慧眼の無相界と法眼の高等感覺界とを併觀する大自由を得玉へり。

ここに於て理感二性の宗教に理性宗はすべて感性を排除し先天的の觀念のみを重んじて、感性と云はば自然のみにあらず高等なる感覺靈象の淨土の莊嚴までを否定せんとし、感性宗は感性と曰はゞ宇宙大圓慧界の靈的現象なるを知らず、幼稚なる天然教と超自然教と併合せる如き衆寶莊嚴の天國は自然界を超たる彼岸に自然界のと同じき物質的の感覺界の淨土實在せりと謂へり。

若し大乘佛教の圓滿なる修多羅が教ゆる處に依て實修實行し、佛陀所證の極樂涅槃界を唯客觀の自然界に求めず、全く主觀的に實修し法眼已上の三眼開目し來て觀ずる時は此を去らずしてアミタ佛衆寶莊嚴の淨土を見ることを得べし。

五眼明了に開き來て始めて圓滿なる佛教を信ずることを得べし。或る一流の理性宗が偏執する如き佛界は唯偏空的の涅槃界に墮すべきなく全た凡夫が執する如き唯自然の實在を實在と執する虞なかるべし。

今美天國を開くの寶鑰は、

美天國は自然界の有頂天九蒼の空に求むべきにあらず、若し全く自然界の蒼天に地位を占むるものと云はゞ、天國を開くの鑰はいかゞして吾人は之を手に採ることを得べき。

淨土を開見するの寶鑰

清淨莊嚴の國土即ち美天國は幼稚なる自然的實在即ち極樂は吾人が衣食せる如きの

物質的實在の即ち全く彼土の宮殿は金銀ルリ寶石をもて全く工巧が人工をもつて造營構成せし宮殿樓閣また七重の寶の樹は本より園丁の栽培より成立るものにあらず。

衣服の莊嚴の具も裁縫擣染浣濯を要すべきものにもあらで皆自然應法の妙服とす。また食物にしても七寶の盃器自然に前に在り、金銀などのもろもろの盃はその思のまにまに其處に顯はれ百味の飮食は自然に盈滿すといへども實に食するものなく唯色を見香を聞きて意に食せりとおもへば自然に飽足す。またこの淸き國土は安穩にして微妙なる快樂あり。本より彼處は無爲涅槃の靈界にませばもろ〳〵の聖者は智慧高明にして神通洞かに達し咸同じく一類にして其かたち異狀あることなく、天人とは名にこそ云ならめ其實には淸淨法身は宛がら虛無の身無極の體、衆の物質元素より化合せられたる細胞の聚合物にてはあらじ。

されば觀經また無量壽經に詳かに讀し玉ひしかの莊嚴淨土の光景は本より自然物素の成立したるものにあらざれば、かの淨土の門を開きて無盡の莊嚴藏を實見せんとな

らばいかなる鑰をもてか之を開くことを得ん。

此につきて若しも清き國を自然物素の中に求め全く幼稚なる物質實在の概念をもて淨き國の門を開かむと欲する如きあらばそはつひに不可能の事に屬するのみにあらず凭る理由は有べきはづなきものなり。

美天國は吾人の如き唯肉眼のみの凡夫に對しては其所在を認識するに由なし。斯ればこそ密敎にては天國を號くるに密嚴淨土と曰ふそは秘密莊嚴の義なり。秘密なる所以は、宇宙本來諸佛の淸淨莊嚴の國土にあれども衆生は佛眼なきが故に其中に住在しながら之を見聞すること能はず。

實に全宇宙には重々無盡不可說の衆寶莊嚴海を以て充さるるともそはみな諸佛如來海印三昧中の現象にして凡夫が感見すべき物質實在の莊嚴にあらず。されば之を開くべき秘密の寶鑰はいかにして之を吾人が手に入ることを得べきとなれば佗に求むべからず、如來は我等が爲に宇宙秘密の莊嚴藏を開くべき寶鑰を與へ玉へり。佛陀が王舍

城に在して韋提希夫人の爲に示玉へる觀無量壽經こそ其の淨土の門を開くべき寶鑰なり。この寶鑰に藉らずして天國の門を開くと云ふの理あることなし。觀經一部の金文をもて淨土の寶藏を開くべき寶鑰なりと云とも聖典の全文また繁し、若し之を直慕に寶鑰を手にするを得ば實にこれ幸福なり、單刀直入いかに寶鑰かこれ天國の藏を開く我はこれ實に、

我は生死の凡夫なり若し天國の鑰を授るの光榮にあらざれば我は空しく闇黑の獄に我神は沈ぬべし、ア、哀れ悲し。天國を開くの寶鑰は決して形質のなかに求むべきにあらず、汝が心靈の深奥に秘める神の聖子在すを知らずや、神は汝が爲に天國に到るべきの豫地を與へ玉へり、また天國を嗣べきの素性を與へ玉へり。

天國を開くの鑰とは即ち念佛三昧なり、念佛三昧とは、經には韋提希夫人が我に思惟を敎へ玉へ我に正受を敎へ玉へと。この思惟と正受とが即ち天國を開くの鑰なり。この思惟正受をまた善導大師は念佛三昧また觀佛三昧をもて宗とすと曰へり。

秘藏の寶鑰

吾人は未だ法眼開けざれば親しく美天國を見聞するの明なきと雖も、今は美天國と云も全く此宇宙を超て高遠なる彼岸に方域を定めたるものにあらで、現在吾人が住める宇宙に於て吾人が業識即ち生理の器械的の肉眼に見る處を娑婆と名づけ、若し佛陀の見たまふ處の如く、佛眼を開きて觀ずる時は即ちここが即ち常寂光の都にてありと云ことは、今は大に領解せり。然る時は已に理に於ては更に疑團なきなれども、全く自から心眼開發して自から親しくこれを經驗せざるほどは自ら安んぜざる處なり。請ふ願はくば我ためにいかに修養を要して而して全く親しく如來の心光に接し淨土即ち天國の樂園に逍遙することを得ん、唯我が爲に示されんことを。

答へて。天國遠にあらず、此身を捨て何の處にか求めん。淨土甚だ近し己心の中に在て顯はれん。

如來は美天國を隱秘し玉はず、衆生自から隔つるのみ。之を礙るものは衆生自身の

心中にあり。淨土を見るの明を障るものを無明と名づく。

如來は天國を開くの寶鍮を授け玉へり。

天國の鍮とは何ぞや即ち教祖釋尊が之を王舍大城王宮に於て韋提希夫人の爲に竊に授け玉ふ。

釋尊が韋提希夫人の爲にこの寶鍮を授け玉ふ因緣を說かば、觀經の序文是なり。

寶鍮とは即ち王舍城の王宮に於て教祖天尊が韋提希夫人の爲に說玉ふ一卷の觀無量壽經是なり。此觀經とは即ち念佛三昧の鍮をもつて無量壽即ち神及び神の聖國を開きて親しく觀見すべき妙法を教へ玉ひしなり。佛陀はいかなる因緣によりて韋提希の爲に此寶鍮を授玉ひしや。また韋提希はいか成必要を感じてか天國を開くべき鍮を佛陀に求めたりしやを暫らく說明せん。

教祖佛陀がギシャクッ山に住し玉ひて諸の菩薩聖者の爲に化を垂れ玉ひしに、時に王舍大城に阿闍世太子なる王子あり。時にかの惡友に提婆調達なるものの誘惑により

て其父王ビンバシャラを收執へて幽閉せる室内に置きて飲食の供養を斷ちて大膳にも父王を殺害せんとの謀計をめぐらせり。其門を護衛して臣下をして其出入を制しけり正妃イダイケこれを傷ふに忍びず工夫をめぐらし酥蜜を以て酥に和せる食を其衣の裏につゝみ蒲桃の漿を身の莊嚴の具たる瓔珞の中に盛て密にもて王に奉る。大王は之を飲み之を食しまた靈山に在ます世尊の聖徒たる目犍連を請して八戒をうけ、能辯家の聞えあるフルナを聘して法要を聞玉ふ。大王は酥蜜を食しまた肉體の榮養としては酥蜜及びブトウ漿を以てし、心靈の爲には佛の正法の養あり、爲に身心安隱し顔色和悦にましませり。時已に三周を經しも父王の健全に在し崩し玉はざるは母后の餉

（以下少しく中絶）

觀經には先づ方便觀として初めに日想觀水想觀を修すべきを敎へ玉へり。日想觀とは先づ夕陽の重暉ををさめて斜に西山に入らんとするとき形麗しく大鼓の懸たる如きの相狀を見てこの印燒に意思を注ぎ一心一意專ら餘念なく思想觀念、神を凝すときは

最とも上根なるものは一座にして明相を發見することを得ん。

明相とは其大さ錢許りの如くまた鏡面の大の如き光曜晃々として喩ば日光の澄澄たる清水に映せる如く美天國の莊嚴藏を開くべきの第一驅は光燿なりとす。或はまた微妙奇麗なる華を感ずるあり、または瑠璃寶地等の種々不可思議なる靈感を實驗することあり。近頃或る青年が病床恍惚の間に光耀に感觸せるを甚だしく自から世に吹聽せるあり。それらは若し眞面目なる宗教家ならば自から秘して佗聞を愼しむべきなり。殊に光曜を感ぜし如きは若し專門家の門に入り軌矩を得て之を修養する時は導師の曰ひし如く一座にして之光曜を感見する者あり。尙進んで觀佛三昧に神を凝し禮拜を用ゆる時は觀經に說相たるルリ地の內外映徹せる光明華の如く星月虛空に懸處せる如き百寶合成の樓閣は蒼天に聳へ七重行樹は衆寶をもて莊嚴し林寶地には功德の水湛へ水はマニ珠玉より噴出しまた無量の光を放ちて光より百寶の化鳥を化出する光景、

また無量壽佛は炎浮檀金の色八萬の相好光明は普く宇宙を照す。

これ觀經の所說暫く美天國の縮圖を略說せるに外ならず。

觀經は天國を開くの寶鑰として韋提希及び一切衆生の法眼の失ひたる者の爲に說玉ふことは已に信ぜり、而してまた日想觀の方便は吾人が法眼を開くの妙法なることも已に承認せり。然るに今進んで愚生が求むる處はすべての方便を捨て驀直に如來の心光と接觸すべき法あらばこれにつきて直に凝神精神を修養せんとす。

されば善導大師は本經一部の宗致とする處觀佛三昧を宗と爲し亦念佛三昧を以て宗とす。

經には一々之を觀して極めて了々に閉目開目にも散失せず、唯睡時を除きて恒に此事を憶へ、如是の想を名つけて粗極樂の地を見るとす、若し三昧を得ば彼國地を見ること了々分明にして具に說くべからず。

また一ら佛を憶ふべし、所以はいかに、如來は是法界身一切衆生の心想中に入玉ふ

是故に汝ら心に佛を念ふとき是心即是三十二相八十隨形好なり、是心佛を作る、是心是佛なり、諸佛正徧智海は心想より生ず、是故に汝ら一心に佛を思ふべし。

導師は若し行者等此三昧を修する時には失意聾盲喑啞痴人の如くならば是定得易し若し然らずんば三業は緣に隨て轉じ定相波を逐ふて飛び、縱令千年の壽を盡すとも法眼未だ開けずと。

之れ念佛三昧の寶鑰を用ゆべき修養法をかくもよく經驗に富める處の導聖が吾人が爲に指南し玉ひしなり。要する處行住座臥二六時中唯一ら佛を思想憶念し。

一心に佛を念する外に佛眼開くべき原因あることなし。

念佛三昧に神を凝し若しは漸次に若しは頓速に如來の心光の和氣に感じ法眼即ち開くべし、法眼開くとき即ち我心靈の曙瞳なり、譬へば金烏東天に昇りて春夜の眠より醒るとき乾坤面目を現はす如く、心眼の醒たる曉に於て清き心靈界は露れわたれり。

神秘の美天國は開かれたり極樂の東門は闢たり、其美天國の衆寶莊嚴の光景萬物は

晃耀煜曜として極りなし、其象相具には觀經に說玉ひし如く具さに說くべからず。

聖源空は平素專ら口稱の一行を以て多年の功つもり覓に三昧を發得して淨土の莊嚴實地また如來の相好色身等を觀玉ふ。されば自から詠じて、阿彌陀佛と稱ふ計りを勤にて淨土の莊嚴觀るぞ嬉敷。然聖好相感見のことは自から記し給ふ三昧發得記に錄せり。

宋の高僧慈雲法師の勸むる處は甚だ易行なり。意に曰く、人若しは官に朝し利の爲に市に趨る。業務多端なるも常に意に佛を憶念すること譬へば若し人心中に切なる事故の密に懸念して其胸中に往來するあらば縱令身の業事作務の中に於ては心中の密事は失はざるが如し。若し常に中心實に佛を嘉せば何の日か之を忘れむ。意常に佛を憶念する時は方便を假らずして見佛を得。譬へば香を器に容れ置く時は器物還て香を薰ずる如く、意常に佛を憶念すれば佛に同化す。若し衆生の心意佛を念する時は佛化せざるを得ず。若し心意佛化する時は心佛を見る何ぞ難からん。

美天國を開くの寶鑰は、佛教に門を設くこと甚だ多しと雖も、見佛三昧をもて最とす。行住度臥に時處諸緣を擇ばず、唯一ら如來を憶念するにあり。若しは口稱にもまた觀念にもそは其人の意樂にまかすのみ。口稱また觀念等は手段にして見佛をもて目的とす。心眼開發して見佛するを宗とす。見佛の要は一切心意を佛化するにあり。若し心眼開發し正しく佛及淨土莊嚴は正に現前す。如來光明に由て自己を觀する時は自己の觀念即ち法界に周徧す。所觀の如來の光明遍法界の故に能觀の心念また法界周徧なり。ここに於て時間に於ても空間に於ても一切の時一切の處に於て如來と寸毫の懸隔あるを見ず。形式に於て如來と接近不可離の關係を完するを近緣と云ふ。

次に如來光明を不可離的に證認するのみにあらず、如來の內容と仰ぐべき大我の愛即ち無緣の慈悲と吾人の心情とは融合し、如來大我の大慈悲の暖溫に感觸して吾人の心情を融液し不可思議歡喜無量、如來と衆生との親密なる關係は、如來の慈愛は父の如くまた母の如く、父にあらざれば生ぜず、母にあらざれば育せず、また如來に對す

る愛慕の念は戀人に對する如きあり、また愛の維繫は同愛同喜相愛親和の感情は其内容を一にす、愛する人の喜は即ち吾喜びと感じ、

如來の大愛光に對する衆生の愛樂は其親密の濃かなること其愛慕の甘きことまた加ふるなし。故にこの關係を愛人の親和に比すべし。

尙深く如來に對する親緣の内容は靈我の即ち大なる我を此と彼との兩方にあらはれし如く、靈我をあなたに投映して如來なるや、如來の大我が我靈我として我靈と現じ來りしや、此彼融合して相分つべからざる不可思議心情として靈的活動し現ぜり、之の内容の最親密なる關係を有するが故に親緣と曰ふ。

如來の中に常に光明に靈化し更生し來りて後の精神生活には、如來の光明は增上緣の加被力となりて衆生の闇き心に光を與へて俗にいはゆるアキラメが能くなる。アキラメとは眞理の光明に自己を返照し理性の光として能く自己の感情を自覺して自ら感情を諭すこと、例へば今我病氣を傳染せしにつき云はゞ、我人の爲に看護し而して此

病を傳染せし全く己が不注意の爲に起因す、決して他を恨むべきにあらず、また俗に云はゞ宿緣の免れざる處とかまたは自己の意向に於て正しからざりし爲とか、なを進んで如來の光明によりて自己を照し見る時は敢てせず、エピクテタスが未だ哲學を學ばざる時は自己他人を責む、而して道に入りて後には人を責めず、自己を責む、修行よく熟する時は人をも己をも責めずと言ふ如く、能く如來の光明によりて自己を返照するときは、いか成出來事禍害に遇ふとも自ら全く理性の光にて照す時は世上の感情は慰安と感じ來る、意志を變化する增上緣。

遮情と表德、眞と妙

吾國に行はれたる佛教の系統は常に二方面に分れて流れつゝあり。一は形式に重きを置き他は内容に本づく。宗教の目的たる衆生の精神を無明と罪惡の素質より脫し若くは救濟して淸淨と光明の方面に轉換せしむるに、衆生の罪惡を解脫し淸淨無垢の靈界に歸入せしむるはいかにして罪惡の垢質を滅却すべきぞ。若し罪惡垢穢なるものが眞實の性ならば、いかにして之を滅失すべきぞ。こゝに於て天台圓教の如きは、罪福の性は、本空性なり。本來空の性なれども凡夫自ら迷ふて實と認む。故に生死に流轉す。罪福本空の眞理を體得する時は、生死も業障も本性空なるが故に圓理を悟り得る時は、無始の罪障自ら消滅せんと。天台圓教は念劫圓融し圓理を體得すれば、一念頓に圓成し佛果現前す。天台には、無明罪惡の凡夫が一念頓成をうる本因は罪福本空なる故なり。無明罪惡と及び其業報所感の世界も本空なり。故に圓理を悟れば頓成す。

罪性は空の故に凡夫頓に成佛すると共に、善と云ひ福と云ひ妙色莊嚴の依正も共にまた本空なり。

故に天台には、其方便階級の別教には成佛には無量莊嚴の依果の淨佛土塵數の相好圓滿の佛身なれども、天台自己の圓教の成佛身土は、罪障の本體と共に無性無相無爲、常寂光卽ち理智冥合の土に淸淨法身無形無相身心土不二の靈體を佛果の身土と爲す。七寶莊嚴の淨土も相好圓滿の佛身もなし。只寂靜無爲の眞理に歸するを以て成佛の境と爲す。若し密教に云はしむれば天台は遮情の分齊にて凡夫が現在の境に實を執し萬事に眞理を了せざるが故に、此迷執を脫却せんが爲に、罪福苦樂淨穢共に空理を體得せしめて、佛果もまた空性無性の方面を解せしむ。最終の眞理に非ず。佛果消極の方面のみ。此には他の積極の方面、卽ち如來圓滿の德を表顯する方を發見せざるべからず。

密教の宗教觀、成佛の果相表明に（　）あり。密教には（　）の佛身及佛土一切の依正

二報皆○是如來不可思議の德相の顯現したるに外ならず。是塵數の相好の佛身、一切衆寶莊嚴の淨土悉く如來本具の德相の現相なり。

彌陀佛教の中に、台と密に比すべき二流あり。

他力宗の遮情の方面を眞宗と呼ぶ。卽ち眞空の義。妙宗と號くは是妙有の義なり。甲は佛身佛土は無形無相にして一切の相を遮す、本來佛は無相無形にして假に相を現したるもそは只方便の相なり。經に無量不可思議の力用と不可思議の德相の佛身無量の相好光明と衆寶莊嚴の淨土の相を說くと雖、そは只方便化土のみ。其實無上の佛身は無相無形にして、佛土は只無相無色の智慧光明のみと。

是遮情の分齊なり。佛の體と相と用とは一體の三面、本來同時同體の三方に過ぎず。眞宗の眞佛土は無相無形を相とする故にまた佛身の體もまた眞空なり。無相消極の佛には、力用も其實は無ならざるべからず。佛に不可思議の大願業力ありて常に衆生を度すとはいかにとなれば、相と用とは一體の異方面なり。無量の德相を具有する佛身

に於てこそ不可思議の力用大願の業力も有すべし。

本無形無相の佛に不可思議の大願力を有すとは是自家撞着なり。不思議の力用あればこそ無量の相妙色莊嚴も現ずべし。

殊にまた無量の妙色相好莊嚴顯現して始めて佛體の功德も有す。若し無色無相にして一切莊嚴もなき佛身佛土ならば小乘の偏眞の果位と何を選むべきぞ。

妙色の相を具せる佛に不可思議の力用を有す。

本迹一致章【一】

大事因緣經の意を案ずるに阿彌陀如來に本地垂迹の二身在ます。本地身とは久遠實成本有法身常住無量壽佛是なり。始もなく終もなく永恒本然にして絕對無限の靈體なり。不思議の威神力を以ての故に十方世界に徧滿し一切の有情を無上眞實の道に安住せしめ給ふ。次に垂迹身とは本有法身より一切衆生を度せんが爲に迹を垂れ給ふ。即ち久遠劫に法藏比丘と現じ無量の大願を滿足し現に淸淨安樂國土に在まして十方世界を照し念佛の衆生を攝取し給ふ。

本有法身より方便法身の法藏比丘と現じ十劫始成の相を示すは却て本覺常住の本佛を顯はさんが爲なり。經に無量壽佛、威神光明、最尊第一、諸佛光明、所不能及とは迹佛が本覺に還つて本迹一致の尊體を示す。即ち法藏菩薩の本地にして十方三世諸佛の法王なり。往生論註に如來に二種の法身あり、一に法性法身、二には方便法身なり、

法性法身に由て方便法身を生じ、方便法身に由て亦法性法身を出す、此二種の法身は異にして分つべからず、一にして同すべからず等。法性法身とは本有常住の無量壽佛にして方便法身とは法藏正覺の無量壽佛なり。十劫正覺は還て本有法身を顯はさんが爲なり。方便法身は迷界の衆生を攝取するの誓を示し、衆生をして本覺の都に歸せしむ。已に正覺の曉には本迹一體にして即ち一切諸佛の法王なり。吾曹の本尊と仰ぐ所の如來なり。迷沒の衆生の爲めに垂迹身を出し本覺の許に還らしめて父子相迎の機を與へ給ふ。ア、大慈父の仁慈仰ぎても尙ほ仰ぎ賴むべきなり。

已に十劫始成は却て本覺本有の無量壽佛を彰はし給ふなり、正覺の曉には迹佛即ち本佛と不二なり。是れ即ち吾曹の本尊と仰ぐ如來に在ませり。

吾曹は迹の十劫正覺を此界に垂れ給はずば本佛の如來の許に至りて父子相迎の期あ

ることなし。

大慈父の慈悲深重なるを仰でも仰ぐべきものなり。

本迹一致章【二】

謹んで法華經壽量品の意を案ずるに久遠實成本有常住の無量壽佛迹を娑婆にたれ伽耶城を去ること遠からず菩提道場に於て始成を得給ひし釋迦牟尼佛も其實は久遠實成無量壽佛なることを明かし給ふ。久遠實成の無量壽佛は久遠より以來燃燈佛等の無量の諸佛と現じ年紀の大小名字の不同種々無數に分れたり。然れども其實は久遠實成の無量壽佛なり。

釋迦牟尼佛と云ふも本と無量壽佛なれば久遠實成なり。また無終にして竟に滅し給ふことなし。

然るに衆生は妄想顚倒に由て見ること能はざるも如來は常住にして滅し給ふことな

し。

本佛の在ます寂光の淨土は無量の莊嚴常樂我淨の四法の滿足する所。

本迹一致章【三】

抑も吾曹の獨尊と仰ぎ奉つる阿彌陀如來は本一體に在ませども衆生の爲に本より迹を世に垂れ給ふが故に本迹の二身ましまします。本佛とは久遠實成本有常住法身無量壽佛始めもなく終りもなくまた絕對無限の靈體にして本有の大般涅槃界に在ませり。一切衆生は本有法身の分子なれども眞に背き妄に隨ひ絕對の靈界を背にして因果の世界に向ひ六道生死の中に流轉す。如來の大慈父無明常沒の迷子を憐み本有常住の法身より迹を因果の世界に垂れ給ひ定光佛等の佛身を現じて衆生を敎化し度脫して滅度に入らせ給ふ。特に大悲の深意子を愛するの親切なるより法藏發心の身を現じて五劫に思惟し永劫に苦難偏へに迷子を救度せんが爲めなり。

謹んで法華壽量品の意を案ずるに吾が救主釋迦牟尼佛若くして出家し伽耶城を去ること遠からざる菩提道場に於て初めて正覺を成ずと唱へらるゝと雖も其實は久遠實成本有法身常住無量壽佛にして迷沒の衆生を憐れみ迹を娑婆に垂れ給へり。本地常住の無量壽佛は久遠劫より以來或は燃燈等の佛と現じ年紀の大小名字の不同にて種々に身を現じて衆生を敎化度脫す。十方一切世界に分化を示す。

本佛如來は常寂光土に常樂我淨の四德莊嚴の淨土に常在して說法し給へども衆生は妄想顚倒して見ること能はず、却て劫盡きて大火に燒るべき此の界の火宅を貪ぼれり又四大假和合の身を執す。此の迷子を憐れみ應化の身を娑婆界に示し給ふ。化盡きて滅度を現じ給へども其實は本地常寂光の極樂に常在して法身の諸の菩薩のために他受法樂を施し無爲涅槃に在ませば永恒に滅し給ふことなし。迷へる衆生は自ら三界の迷城に止まり順ふ者は法性常樂の靈界に歸す。

仰ぎても仰ぐべきは我慈父大悲方便。

本迹不二

本佛とは自性天眞十佛の自境界宇宙の實體本來如來の淨法身成も不成もなく本來自性天眞の如來である。一眞法界とも如來藏妙眞如の性ともまた六大無碍の理智不二の大日とも名づく。

法華經には久遠實成三身即一の淸淨法身の如來とも名づけたり。元來宇宙の本質は如來の眞法身である。之を楞伽經には身土不二の阿彌陀極樂國と名づく。十方一切の法報應も衆生も聖賢も悉くこの本體より生ずと說けり。

本佛とは學語にて眞如法性等と名づけ絕對無限平等の理性である。相待差別の萬物の爲には裏面の平等方面に外ならず。之を法性法身また本佛と名づく。永恒自存の天眞佛である。

世俗に宇宙心と云ふべきもので斯る眞理は法爾法然として法界身として實存するの

である。

眞神また眞如來、體あれば之に屬して自ら象なきを得ず。相ありまたこれに本來活々潑的の體には必ず活動すべき力あり。この象と力の二屬性をもて體相力の三大となす。此三大は法爾とて宇宙の實體が現象すれば自ら二面とならざるべからず、千差萬別の現象の反對なる方を平等の實相と名づく。全體の力によりて開展せられたる現象の方面に萬物を開展す。

相を云はゞ實相と現象、力に云はゞ生滅と寂靜の二方面なり。生滅の現象と眞如の實相とは一體の兩方面、千差の波と一海水との異を呈す。

現象生滅の方面に生產せられたる萬類は眞を背にして塵に向ひ自然律に準へり。生滅の世界の衆生を攝取せん爲には之に適する手段がなくてはならぬ。之を方便法身と名づく。法性自然自性天眞、本より法佛の眞理と智慧と靈能とは法界に法爾として含蓄して居る。けれども自然に生得たる精神は眞に背きて塵に向つて自らこれを悟

ること能はず。

衆生の爲には方便法身の必要あり。この方便法身は本佛の眞より垂迹して如來の本質が衆生の機に相應せる身をもて衆生を度脫の道を示したまひしなり。之聖典に現はるゝ事甚だ多しと雖も通別の二つに分て悉く攝せらるゝなり。

通じて垂佛とは先づ法華の壽量品に本迹を示して本佛は久遠五百塵點劫のみならず究竟して無始無終にて壽命永恒の生命にて常恒何の處にも存在するなれども衆生が無明に目しいて自分から見る事能はぬのである。

であるから無量劫以來何の所を撰ばず機緣熟すれば當處に出現して說法敎化して常に暫くも休止することなし。或時は燃燈佛と云ひ須彌燈と云ひ名字の不同と年紀の不同とを以て示したるものなれども實は久遠實成の本佛である。此久遠實成の佛とは壽量極りなく慧光照無量壽命無數劫の如來にて即ち阿彌陀如來なり。

過去無量劫前の定光佛も今現に釋迦牟尼と云ふも假の形骸には異なる如くなれども

眞の如來法身には別なるものでない。

諸の聖典に擧る所の十方無量の佛刹に示現敎化の諸佛賢聖は皆悉く彌陀の本願即ち目的を示さん爲の方便法身また垂迹の法身と云ふべきものである。

歷史的の釋尊にしてもよしや神話的の救濟主にしても之によりて全く衆生のために活ける宗敎的關係をなす所の客體として事實的に應用せらるゝ上はまた方便法身と云はざるべからず。阿彌陀經の六方諸佛恒沙の諸佛の如きも各其國に於て彌陀の聖意を示さん爲に出たる聖者なりと云ふことを得べし。

また楞伽に十方の諸佛菩薩聖賢變化人に至るまで皆な彌陀極樂心中より出づと。之によりて之を見れば現世界に歷史的に出たる支那の孔子ギリシヤのソクラテス猶太のキリストの如き同じく凡質を越へたる如來の本質より世界質の肉を被りて出たる聖賢變化人の外にあらず。

斯く種々の名字を異にしまた眞理を示すに酸甘其味を種々に異するは蓋し其時機と

處とに應すればなり。大聖世に出でゝ世を救ひ衆生を利する點に至つては其機一なり。之を通じて方便法身の垂を明かす。

別して方便法身とは今經典に説く所の法藏因位の願行より十劫正覺の果上に至つては全く本覺の如來が本質は超然として因果を超へ相對を絶するも相對因果の方面に生滅し起伏する衆生を攝して解脫せしめんが爲に法藏の因位に無量の大願を起し無量劫に功を積み德を累ねて衆生の爲に極樂無爲涅槃界の靈門を開き通入せしむ。

因圓果滿本迹一致の德を彰はして阿彌陀如來と號すまた盡十方無礙光如來と號す。

如來はもと絶對にして因果に超絶すれども因果各自の因果に束縛せられて解脫すること能はざる衆生に對して而も因に六度萬行を積み果に法性法身に充滿せる德性を具體的に發示す。

超絶たる絶對の眞理を相對事相に顯はし、萬德莊嚴の相好と七寶莊嚴との色相は蓋し如來本質無相の相、智慧光明は一切を攝取し靈化する靈能即ち法身體相用の三大が

事相に顯はれて如來相好光明普く十方法界を照して佛を念ずる衆生を攝取して捨てずとは蓋し絶對の眞理のみにしては相對規定の衆生を救濟すべき關係を結ぶこと能はざればなり。而して相對事相の如來と衆生の性質は對比して衆生を解脫靈化せしむ。

如來は大智慧の光明にして衆生は無明黑暗、如來は大慈悲衆生は溺苦海、眞理にして非眞を照し至善に在して衆生の罪惡を換へ至美にして衆生を穢より、の如き、如來は眞善美、衆生に對して善の方にして衆生は惡なり。而して衆生は己が無力罪惡を自覺して如來の眞善美に投歸沒入して如來に靈化せしめんが爲のみ。

此眞理を表さんが爲に經典に四十八願をもて主觀客觀界の兩方面に所有の非眞非善非美の所謂人天の善惡國土の麁妙を選捨して人天の善と國土の美妙なるとを選び取て之を發願す。

十八願に至つては衆生各自己の我執と自己中心と肉の幸福主我とは罪惡なればこれを己を捨て全心全體に如來を信じ愛し欲生せんとするものは之を選び取て捨てずと。

法藏酬因感果の方便法身は法性法身を示めす爲なり。本來法性法身は法爾として萬德豐備の如來なるも自境界は一度塵に向て眞に背きたる衆生には因果律を離れて相對規定を超えたる世界には關係を結ぶこと能はず、故に元來法性法身卽ち本佛に備はる所の萬德を具體的に因果相對の方面に彰はして衆生を攝取するは善巧方便なり。假令法性身に萬德豐備の性德具すと云ふも之を顯動するにあらざれば性能また何の功かあらん。因に菩薩の萬行果に正覺依正の莊嚴は一々悉く法性の德の顯現たり。

衆生はもと法身の所生なればまた之を開顯すれば佛果の性德を具すれども一たび背きて本質を亡ひたれば之を顯動すること能はず。カントが云ふ如く神の國を顯はすには無限の時間を要せざるを得ず、然れども己をすてゝ已に萬德顯現せる如來に歸同する時は自ら萬德現はるゝなり。

吾人の心靈には眞善美を觀念する時はこれと同化する心理性具すればなり。

己を亡じて如來の慈悲を念ずる時吾が心慈悲となる。相好光明を念ずる時吾心相好

光明なり。智慧を念ずる時我心智慧化す。無礙光を念ずる時無礙光たり。

如來一大理性に具はる萬德を顯現して之に投せしむるにあらざれば衆生は自己の性德を顯はすこと能はず。

如來は衆生の性德を成せしめんが爲の方便法身なり。

法藏の因位悲壯の願行は衆生の宗教的感情を感せしめんがため、果感淨土依正の二報の莊嚴は衆生の理想とし欲望として宗教的活動の動機となる方便法身なり。

釋迦稱名章

本有法身無量壽佛久遠劫に法藏比丘の大願を建てゝ始覺十劫の無量壽佛を示して却て本覺を彰はし久しく在て後近くは釋氏の家に降生して伽耶城正覺の釋迦牟尼佛を示現し給ふも同一の阿彌陀如來なり。法藏成佛して無限の光明と無量の壽命を證して所證の體に名けて阿彌陀と云ひ釋尊また同く無限の壽と無量光を證し給ふ。故にまた釋

迦も阿彌陀如來なり。遠く往昔に能證の人を法藏と號し近く釋迦と名づけたりとも所證の法體は同一の無限光と無量壽なれば何れも同く阿彌陀如來と名づくべし。釋迦とは受姓の名字にして卽ち族姓の名なり。

阿彌陀とは成佛の法體なり。故に法藏の誓に永恒常住の阿彌陀の名を以て念ずべきを敎ふ。釋迦成佛の日にもまた阿彌陀の名を以て念せよと示す。其所以如何となれば佛法の宗とする所、一心を橫に無量の光明を以て永遠常恒の光明を證得し永恒常住の涅槃に歸趣せしむるを宗致とすればなり。

久遠の無量壽佛を、今の佛敎には、卽ち例へば淨土家に於ては、阿彌陀佛としての尊影應化の相は卽ち釋迦牟尼の聖影を以て阿彌陀佛と名づく。釋迦彌陀は一體の異名なれば行者本尊を表示するは卽ち釋尊を以て彌陀となす。若し念佛する時は釋尊卽ち阿彌陀佛なれば南無阿彌陀佛と稱へて釋迦佛を念ず。寔に是れ互影して本迹一致の旨を示す。

故に吾人阿彌陀佛を念ずる時は釋尊の相好を念ふ。釋迦佛を稱ふるに釋尊の心たる無量光壽卽ち阿彌陀佛の名字を以て稱名とす。此中に還て圓滿なる宗教意識を爲す所以なり。

若し釋尊の相好を通じて無量光を念ずるにあらざれば何に依てか一心の標する所を得む。また釋迦を稱するに阿彌陀の名字に由らざればいかで眞實釋尊の眞理に接することを得べきぞ。智あらん者須らく此眞理を會得すべし。

我ら一心に佛を見んと欲して戀念止まざる時は阿彌陀佛卽ち釋迦の相を以て現ずべし。釋迦の所證の眞理は卽ち無限光と壽となれば阿彌陀の名字を以て釋迦を念ずべし。釋迦の相好を以て阿彌陀佛を想ふべし。互映して如來三身一體の眞理を標すなり。

光明歎德章

至大至永なる眞の如來は、無上の權威と無限の光明とは一切に超越し、唯一獨尊にましませり。人中の大聖たる諸の佛陀等の比類にあらざるなり。

絕大絕妙の如來は、不可思議の靈德ましまして、思慮に超え言辭譬喩も及ざばる處なり。尊き號を以て其靈德を稱するに非るよりは、之を表明するに由なし。

聖き號をもて靈德を稱へ上らん。

法身體大にして絕對無限なり、處として實在せざる無きが故に無量光と號し上る。

智慧象大にして法界に徧し、處として照さざる無きが故に無邊光と號し上る。

解脫用大にして妙能無碍なり、處として融化せざるなきが故に無碍光と號す。

一切に超絕して最勝無比、如來の眞を顯すを無對光と名づく。

惑と業と苦の垢障を除滅して解脫靈化するを炎王光と名づく。

感覺を靈化し八面玲瓏六根を清淨にするを清淨光と名づく。
感情を融和し如來に安立し靈福を感せしむるを歡喜光と名づく。
正知見を開き靈を示し、眞理に悟合せしむるを智慧光と名づく。
意志を靈化し聖菩提心を成し、道德行動せしむるを不斷光と號く。
如來眞境甚深難思、初心の入り難きを難思光と號す。
深秘內容、自獨證知、超絕言說の故に無稱光と號す。
正見を與へ佛の正道に入れ無上道に到らしむるを超日月光と號く。
其れ衆生ありて斯の靈光に感合する者は、智力と心情と意志との三能の垢質を消除して正知見を開き、身と心と共に溫和柔順となりて平和と靈福に充され、意志靈化して至善と成り、最高等なる心靈的生活を爲すに至らん。若し邪惡にして主我惡の病的にいたり、已に三惡道に墮落するものも斯光明の緣に觸るゝことあらば、大なる慈悲によりて彼等は苦惱を休らふことを得べく頓がて解脫することを得べし。

最と尊き生ける如來の大なるみ光りは顯赫にして十方のあらゆる處に照耀せざるなし。いかにとなれば、十方一切の刹土は此一眞理の爲に統治せらるればなり。

しかれば唯我今眞の如來の無上の力と光とを讃め稱へるのみにあらず、あらゆる諸の刹土の大聖たる佛陀または小聖哲人たる緣覺聲聞たちに至るまで、悉く如來の無限の力と無上の光とを稱へて讃美せざるものはなし。その所以はいかにとなれば、すべての聖賢は聖眼を開いて眞理の光の大なることを知見するが故に其靈德を歎じて止まざるなり。

若し人ありて上に說く處の如來の無上の靈德にましますことを聞てよりは、平常に自己を捧げて拜禮し、聖經をよみまた解說し、眞境に冥想觀念を凝らし、聖き名を稱へて聖旨の自己に實現せんことを祈念し、自を捧げて事へ上り、聖き德を讃美し上る等をもて、

至心に深く如來を信じ愛し靈に入らんと欲望して實に恭敬し無餘に無間に長時に信

念する時は、若くは頓速に若くは漸次に純熟し、一旦豁然として靈光を感じ恩寵開展することを得ん。こゝに於て天然の情操を一轉して心靈生活に入るを更生と名づく。

然してより人有爲の依身は轉せざれども神は無爲聖城に栖み遊ぶ。

こゝに安立する心靈は靈氣に化せられ靈福を感じ、世の毀譽八風の爲に動かされず、如來指導の下に行動し最も高き心靈的生活を遂げん。

而して後此依身を脫する時は、正しく如來の靈界に歸入することを得。

眞理の靈體は聖德と靈福とに充され、普賢の行願に立つて、生死の園煩惱の林に遊んで普ねく法界の衆生を度せん。乃至無上覺位には如來同化の德として徧く十方聖賢の爲に稱讃せらるゝに到らん。

ア、讃むべき眞理の源にまします唯一の如來よ、如來は全智と全能にましませり。如來は不可思議にして一切に超絶したまふ。絶對無限にして無限の生命と光明とにましませり。

如來宇宙萬物の實體にしてまた之に統一せられざるものなく、如來の目的に歸して我等は眞理の靈界に歸趣し上らんことをねがふ。無限の能力にまします如來、神聖と正義と恩寵との大なる德をもて、一切を統治したまふ。至眞至善至美にまします唯一の如來よ、我等を如來の靈界に歸趣せしめよ。

無量光壽

終